〔翻訳〕

ナチズムと古代

－1933年から1945年にかけての古代史専攻の動向の研究－（その１）

フォルカー　ローゼマン 著
酒枝 徹意 訳*

―― 目 次 ――

第１部　大学における古代史専攻（1933-1945）
第１章　大学の＜粛清＞と古代史専攻
第１節　政治的、人種的迫害の犠牲者としてのドイツの古代史家たち（1933-1945）
第２節　ドイツ古代学の＜亡命による損失＞
付録　ドイツ帝国における古代史講座教員配置（1933-1945）

第１部　大学における古代史専攻（1933-1945）

第１章　大学の＜粛清＞と古代史専攻

他の全ての専門諸学と同様、古代学もまた、ナチスの権力掌握後、ドイツの諸大学を通過した＜粛清の波＞に襲われた。この専門分野では、人種法の意味での＜ユダヤ人＞概念は、非常に広く解釈され、政治的敵対者よりも、その迫害は、むしろ圧倒的にユダヤ人住民に属する者たちに向けられた。

以下で叙述されることを先取りしたこの確認は、錯綜した反ユダヤ主義に関連しているだけではなく、ここでは全く概略的にしか論じられ得ない1933年以前のドイツの古代学者たち、特に古代史家たちの政治的立場についての問題も、間接的に又投げかけているのである。新しい研究は、帝政末期とヴァイマル共和制期

＊ Tetsui SAKAEDA　本学名誉教授

における≪ドイツの学識者対策の方式と目標≫に興味を強く持ち、考察してきた。その場合、賞賛に値する印象的な分析評価は、この時代におけるドイツの古代史家たちの政治的立場を明らかにするためには必要である史料的な基盤ではなく、1914年から1933年の時局講演、それに教授たちによる諸決議に向けられていた。[(1)] 1969年、ティーセンフーセンは、第一次世界大戦に直接遭遇した同時代の歴史家の二種類の信念に関して、凡そ、＜古代史家と中世研究者は、殆んど専ら併合論に傾き、近代史家は、例外なく協調による平和に傾いていたと云う目立つ現象＞を指摘した。[(2)] こうした問題と、全体的な関連が必要不可欠な考察は、今日までなお言うまでもなく着手されていない。これまでは、これらグループの政治意識の全く大雑把な傾向がただ追究されて来たに過ぎない。

1871年以来＜ビスマルク帝国の優勢な、保守的―国民自由党的な社会的環境の中で、歴史学の問題提起、価値体系、それに思考は、圧倒的に＞市民権を得ていたとすれば、そのことは、古代史家にも当てはまっていたと云ってよい。[(3)] 大半の大学教員と同様に、古代史の代表者たちも、やはりヴァイマル共和国に対して少なくとも控え目な態度を取り、＜理性的共和主義者＞というマイネッケによって特徴づけられた概念に共鳴していた。ヴァイマル共和国においてマイネッケが代表していた比較的穏健なグループに、公然と、より積極的に関与しているものは古代史家には一人もいなかった。[(4)] 大多数の大学教員たちが、＜典型的に、≪非政治的≫であるのは＞自明であって、それで、政党政治に対し距離を置いていたのだと勘案されたとしても、そこから、この時代におけるドイツの古代史家たちは、広い意味で保守陣営に組み入れられ得ると推論することが可能であろう。[(5)]

個々の立場は、明白に把握される限りで、それらは、ただそれ自身を示しているに過ぎない。晩年のテオドール・モムゼンの立場は、彼の同僚たちの多数派には決して典型的なものではなかった。モムゼンは、1880年以後、＜プロイセン的＝ドイツ的権力国家の誤った方向への発展＞と云う数多くの批判のために、ドイツ帝国議会における分離主義者サークルに数えられ、それどころか亡くなる直前には、自由主義者と社会民主主義者の提携さえ述べていたのであった。[(6)] モムゼン後の最も影響力のある古代史家に数えられていたエドゥアルト・マイヤー（Eduard Meyer）は、ドイツ国家人民党の陣営に加わっていた。第一次世界大戦の開始と共に、＜政治的関心を持つ学者たち＞のサークルにおける指導的役割

が、彼に割り振られていたが、1919年秋、彼はベルリン大学学長に選ばれて、その頂点に達した。＜国家の極端な重視と情熱的な君主制礼賛＞は、政治的文書においてだけではなく、マイヤー全集にも現われている。[7] 顕著な＜反民主主義的な基本姿勢＞[8]とその他の政治的立場においても、マイヤーは、古典文献学者ウルリッヒ・フォン・ヴィラモーヴィッツ－メーレンドルフ（Ulrich von Wilamowitz-Moellendorf. 1848－1931）に出くわしたのであるが、彼は、学問的重要性によって、それに、その専門以上に政治的影響力によってマイヤーと、かつ―その政治的主張において大きく異なっていたが、彼の舅でもあるモムゼンとも比較され得る人物であった。[9]

明確な敵対的な－或いは、アウトサイダー的立場を、ドイツの古代史家たちの中で、アルトゥール・ローゼンベルクが示していたが、彼は、共産党議員として(1924－27)、そしてヴァイマル共和国の修史家として広範囲に知られていた。[10] ローゼンベルクの政治的方向は、何よりも徹底的に彼の専門領域の保守的気質に対応していたように見える。カルステンによれば、ローゼンベルクは、1917年７月のドイツ帝国議会の和平決議反対者たちと提携した祖国党の党員（1917／18）であった。[11] 戦争終結後、独立社会民主党（USPD)、後のドイツ共産党（KPD）に方向を変えた。その更なる運命について、以下の節でなお詳しく扱われるローゼンベルクを以って、完全なアウトサイダー的立場の特徴が明らかにされ得た。反対に、ドイツ国家人民党の指導的代表者としてのエドゥアルト・マイヤーやヴィラモーヴィッツは、ドイツの大学教員全体から見れば、過激な周辺集団に入れられ得るのである。[12]

諸大学が、＜ナチズムの手に比較的簡単に帰した・・・＞ことに寄与したのは、ドイツ国家人民党によって強制された反民主主義的な基本姿勢とか権力国家思考だけではなかった。[13] そのための更なる必要条件を、大学分野で確認し得る＜潜在的な反ユダヤ主義＞（W. Jochmann）に見ることが出来る。その点は、ノーベル賞受賞者のユダヤ人化学者、リヒャルト・ヴィルシュテッター（Richard Willstätter）に対する反応に言うまでもなく明らかであったが、1925年ミュンヘン大学の教職を、彼は取り消されたのであった。この処置について、＜偏狭で不寛容な反憲法的な＞多数派学生の＜本能的な＞反ユダヤ主義のことだけを考えさせられるのではなく、たとえ圧倒的に日和見主義的に動機づけられた観点にせよ、

学部教授団の招聘協議においてさえも、同様なことが暗黙の役割を演じ始めていると云う観察も、彼は余儀なくされたのであった。(14)

古代史家たちの間では、1933年以前には、その学術書の中で同僚を軽蔑的にユダヤ人と記述していたカール・ユリウス・ベロッホ（Karl Julius Beloch）の具合の悪い攻撃は、例外扱いのままだった。(15) 長年ゲティンゲン大学の古代史の代表者であったウルリッヒ・カールシュテット（Ulrich Kahrstedt）の態度は分裂していた。ドイツ国家人民党（DNVP）の指導的党員として、一方で、＜彼は、政治に関心を持って以来、反ユダヤ主義者であった＞ことが知られていたが、他方で、彼によって編集されていた *Eiserne Blätter* の中では、彼は、非常に鋭く反ユダヤ主義文学と対決していた。(16) 反ユダヤ主義と社会主義によって、第一次世界大戦の戦勝者たちを≪憎悪する能力≫が無力化されてしまうだろうことを、彼は憂慮していた。カールシュテットによって代表されていた党派にとって、反ユダヤ的綱領は、＜実際的、政治的目標を、ただ東部ユダヤ人問題の中に持ち、かつ、その戦いは、ただ精神的－倫理的かつ経済的領域において重要であり得る＞と云うことは明らかなことであった。他の党員のように、ユダヤ人の政治的な平等な権利を廃止することを考えず、むしろ＜反ユダヤ感情における戦いは、ただ、恥ずかしくない仕方で、清純な武器を以って、―忘れずに分別を以って―導かれるべきである・・・＞(17)と考えられていた。カールシュテットのように、―何らかの理由からであれ―主張したい個人的な留保条件とは関係なく、政治的関心を持つ学者たちのこの反ユダヤ主義の形式は、後年、ユダヤ人迫害を共に可能にした1933年以前の広範な反ユダヤ主義の流れの中に最後は合流して行ったのであった。

第１節　政治的、人種的迫害の犠牲者としてのドイツの古代史家たち（1933－1945）

大学の≪粛清≫に対する第一の機会を、1933年４月７日の非アーリア人と政治的反対者から彼らの職務を取り上げる包括的可能性を持った職業官吏制度の原状回復に関する立法が与えた。網に相当する立法、告示、行政命令等は、多くの者によって最悪の帰結と感じられた身体的亡命が不可能にされた1941年10月23日の海外移民禁止法に至るまでにより詳細になっていった。(18)

これらの諸措置に見舞われた人々に関しこれまでに提示されてきた数字による

資料は、精神諸科学を、ひっくるめて、ただ上位単位として捉えている。古代学の組織構成が、更に、これらの報告をいっそう詳細に分析することを著しく困難にしている。[19] 以下の粛清の波の影響の概観、特に古代史に対する影響のそれは、こうした事情で全く完璧さを求めることは不可能である。[20] しかし、この概観も、それでも、こうした行動の広がりについての印象、それに当該の人々自身にとっての直接的、かつ長期間の様ざまの結果についてのイメージ、それに古代学の動向等を伝えるのには役に立つかも知れない。先の時間的枠の中で、先ず、1933年前後の個々の者たちの運命と、彼らの学問的な経歴の特別な諸条件から出発しなければならない。それは又、時に＜称賛する＞と云う調子に嵌ってしまう危険を冒して、であるが。[21] ドイツの専門分野の代表者たちは、―記念追悼記事の、大方包み隠されたままの論評から目を転じれば―殆んど例外なく、経歴のすべてを＜称えること＞は拒んでいると云う事実に対して、一つの研究課題すらそこに見ることが出来るだろう。[22]

失職の詳細は、具体的な個々のケースにおいても、立証するのを非常に難しくさせている。そのことは、正しい日時だけではなく、個々の事由にもまた当てはまる。政治的理由による解職、人種的理由による解職、或いは宗教的理由からの解職（また、道徳的な抗議の結果としてのそれ）は、しばしば休職、或いは自由意志による退職と同一視され得たのであり、そうした場合、その動機は、何重にも重ねることが可能であった。その当時は決定的であった確かな個人的データは、今日ではただ例外的場合にだけ持ち出されねばならないのは、当然である。[23]

権力掌握後の最初の数ヵ月で、ベルリン大学だけでも、エリーアス・ビッカーマン（Elias Bickermann）、アルトゥール・ローゼンベルク（Arthur Rosenberg）、それにエルンスト・シュタイン（Ernst Stein）と云う３人の古代史家を失ったのであり、同様に、ギーセン出身の専門仲間のフリッツ・ハイヒェルハイム（Fritz Heichelheim）は、速やかに外国に避難所を求めたのであった。専門機関誌の人物欄には、こうした出来事は、異なったやり方で表わされた。*Gnomon* では、＜ベルリン大学の古代史及びビザンティン史の官吏であらざる員外教授エルンスト・シュタインは・・・自ら申し出て、教授陣から退いた。＞とだけしか、人は知り得なかった。*Klio* の告知は、彼のブリュッセルへの転居も記載されたシュタインのその件についてだけでなく、ずっと詳しかった。また

学界の通常の報告スタイルで、私講師のE. ビッカーマンの招聘に関して、パリの≪第一高等研究院≫（École des Hautes Études I.）のパピルス学の職務と、同様にフリッツ・ハイヒェルハイムに対する≪ケンブリッジ大学古典学科とロックフェラー財団の研究奨励金≫について報告されていた。＜ベルリン大学古代史、非常勤・員外教授アルフレート〔ママ！〕・ローゼンベルク＞はパリに居を定めたと云うだけの短信は正確ではないが、少なからず啓発されるものであった。[24] その経歴の後半に至って、公職を失った者たちの過半は、＜職務上の責任を解かれた＞か、全く単純に＜退職した＞かどちらかであった。時には、＜自らの申し出＞と云う補足によって、この言い回しが補完された。[25] こうした大学消息における解職の言葉遣いに比べ、以下に明確にされるように、当事者たちの実際の運命は、全く対照性を示していた。

1933年にドイツが失った古代史家たちの中では、**アルトゥール・ローゼンベルク**は、最も注目を集めた人物と見做してよい。1927年に実行された共産党からの脱退後も、彼の政治的姿勢には、全く疑念はあり得なかった。ナチスの権力掌握の直前、*Weltbühne* で、≪ドイツ諸大学の共和主義並びに共産主義大学教官≫の名においてなお、彼は＜コーン事件＞に声を挙げていた。ローゼンベルク自身もまたユダヤ人大学教師として、いかに強く関心を持ち、かつ脅威を感じていたに違いないかをこの記事は正に示している。[26] ローゼンベルクの大学教員からの解職は、彼の『マルクスから現代までのボルシェビズムの歴史』（1932）から推定された、彼の＜ボルシェビズムを支持し賛美する＞傾向に関して起こった。[27]

ローゼンベルクは、1938年、これまでを上手く概観している寄稿『亡命歴史家の使命』の中で、彼自身の立場を暗に示し、同時にそこで、1871年から1933年までのドイツの歴史学の危機的な発展を彼の視点で辿ったのであった。[28] 彼には、亡命は、先ず＜いわゆるブルジョア的歴史家の一派と社会主義的歴史家の一派の相互の孤立を突き破る＞機会を与えるように思えたのであった。その最も重要な前提は、いかなる立場であれ＜研究上の新らたな独断＞の断念であった。＜社会主義者と共産主義者、ブルジョア民主主義者と社会進歩主義的カトリック教徒ら＞は、＜第三帝国の否定から、歴史学に対してドイツの将来の肯定的な新たな原理を発展させること＞を、協力して求めなければならない。[29]

古代史に対する数多くの研究の中で、彼には、1938年を顧み、取り分け「古代

における民主主義と階級闘争」（1921）と云う論文で扱われた考察に、＜更に問題を論じる＞だけの価値があるように思えたのであった。彼自身の時代の浅薄な民主主義概念に対する対立物として、＜しかも、全く社会主義も知らず、しかし仮借なき実行力をもって、働く民衆の自治の実現を求めた公共的制度としてのアテナイ民主主義＞を、彼はそこに提示した。[30] 彼の＜親しい専門家集団＞にはっきり向けられた論文には、ローゼンベルクの政治的立場に関しては、ほとんど何も見つけられない。社会主義陣営に彼が転じた後に出された『ローマ史の入門と史料情報』に関しても、その点は、顕著に認められることであった。[31]

同時代史的歴史叙述の重要性に対する意識を、ローゼンベルクは、≪1918年の破滅の根本原因に関するドイツ帝国議会委員会≫の委員時代に、彼は述べていた。[32] 新たな歴史へ一変した後も、彼は、相変わらず、「独裁と民主主義に関するアリストテレス」（『政治学』第三巻）と云う論文を古代学の紀要に掲載し、その中で、一見して、このテーマの背後に想像され得たであろう昨今の政治には全く力点を置かずに、ヴェルナー・イェーガー（Werner Jaeger）の仮説を批判的に分析していた。[33]

ローゼンベルクは解職されるまで、自らが教師職にあった時には、また彼が政治的に活動していた期間にも、古代史の諸問題を研究しており、その場合に、彼は公然と史的唯物論によって捉えられた傾向を追い求めていた。[34] 亡命者として、ローゼンベルクは、リヴァプール大学で（1933－38）、古代史の客員特別講義をただするしかなかった。[35]

エルンスト・シュタインは、青年時代ヨーロッパの様ざまな文化的風景に触れてきた。[36] 彼は、ユダヤ人、ドイツ人、それにチェッコ人たちが一つになっていた多民族国家のオーストリア・ハンガリー帝国の東部出身の両親から生まれた。彼は、学校時代、著名な考古学者である彼の叔父のアウレル・シュタイン卿（Sir Aurel Stein）と一緒であった英国、それにまた幾らかの期間をフランスで過ごした。[37] 彼の教師たちの中では、取り分け1889年からヴィーン大学でローマ史、及び中世史の私講師として活動していたモムゼンの弟子、ルドー・モリッツ・ハルトマン（Ludo Moriz Hartmann）を挙げることが出来る。ハルトマンの刻みつけた影響は、シュタインの所々に自伝的描写を入れた彼の教師の追悼文にも表されていた。ハルトマンの特異な信仰告白観についてのシュタインの覚え書は、

彼にとって、1932年にカトリックへの転向を以って終わった人格的な対決を映していた。[38]

歴史家としてのシュタインは、古代史とビザンティン史の分野を同等に深く修めているのは明らかだった。両専門分野に対して、1919年ヴィーン大学で教授資格も認められた。行政史の問題に対し特別の興味を持ち、彼は1927年からローマ時代ドイツの軍事史並びに行政史を扱っていた。[39] 1929年エドゥアルト・マイヤーが、彼をフランクフルト大学から、ベルリン大学に私講師として連れて来た。１年前、彼は、彼の主著と見做され得る『後期ローマ帝国史』(Geschichte des spätrömischen Reiches)の包括的な第一巻を著していた。ベルリン大学教授陣には、彼は合わせて４年所属したに過ぎなかった。[40]

シュタインの政治的横顔は、1932年＜ゴットリープ・ヘルゼーアー＞（Gottlieb Hellseher）と云う匿名でベルギーで公表された記事「ドイツに関するプロジェクター」（Un Projecteur sur l'Allemagne）に現われていた。[41] 編集者によって、熱狂的な平和主義者として紹介され、シュタインは、＜ドイツ人心理の推移＞（cours de psychologie teutonne）において、ヴァイマル共和国の政治的光景を詳細に吟味していた。[42] 彼は殆んど全ての陣営の狂信的愛国主義の傾向を警戒し、極左と極右によって迫っている様ざまの危険を鋭く論じていた。ヴァイマル時代の諸党派に対する批判によって判断すれば、筆者は、党派に関係ない社会主義的立場を占めていた。彼が、中央党の歴史的役割に示していた注目すべき共感は、その点と必ずしも絶対に矛盾するわけではない。[43] 彼は、幻想を抱かず、ナチスが権力を掌握する機会は、共産党のそれよりも更に高いと判断していただけではなく、強制収容所に至るまでのその結果と来るべき戦争も予見していた。[44]

ブリュッセルに客員教員として滞在していた時に出会ったナチスの権力掌握直後に、彼はドイツにおけるあらゆる公職から退き、その決定を取り消すことを繰り返し勧められたにもかかわらず、拒んだのであった。ドイツとの断絶は更に続き、彼は、それ以来フランス語でしか発表せず、更にナチズムと関係を結んでいた同僚とのあらゆる交わりを拒絶した。アンリ・グレゴワール（Henri Grégoire）の斡旋によって、彼は、ブリュッセルで≪東洋文献学及歴史研究所≫（Institute de Philologie et d'Histoire Orientales）に仕事の口を見つけ

たが、そこは数多くの亡命者たちの溜まり場であった。[45] 1934年、シュタインはアメリカに向かい、２年間滞在し、そして最後に1937年ルーヴァン大学でビザンティン学の教授職に就いた。彼は、伝記でパランク（Palanque）が示していたように、この時代にも日々の政治に対する強い関心を持っていたことを示していた。ベルギーとフランスの占領期間中、彼は南部フランスで幾らか手に汗を握るような状況下で姿を消さなければならなかった。1942年やっと、彼はスイスに脱出することが出来、そこでジュネーブ大学に私講師職を得た。既に軌道に乗せられていたルーヴァン大学への復帰直前、54歳で彼は亡くなった。『後期ローマ帝国史』（Histoire du Bas-empire）の第二巻成立に至る歴史は、彼の夫人が後に描いているシュタイン自身が当時置かれていた困窮状態を証言している。[46]

エリーアス・ビッカーマンの生涯は、特に深く亡命という運命がそこに刻印されているように思える。第一次世界大戦が終了してからも、1921年まで、彼は故郷ロシアの戦闘に従事していた。その後、1922年ドイツに将来を求め、そこで、ロシア人亡命者の民族団体と密接な関係を保持していた。[47] あの時代のビッカーマンの立場に関して啓発されることの多いのは、彼が1925年に *Die Deutsche Nation* に公表した「1888年の無名人の独仏宥和の企て」という論説である。[48] そこで、ビッカーマンは、ドイツの文化哲学及び宗教哲学者であるモリッツ・カリエール（Moritz Carriere）のエルンスト・ルナン（Ernest Renan）に向けられた＜公然と宥和の旗を掲げ＞、アルザスの併合に対する報復願望を放棄すると云う要求を現代に対応させていた。[49] ティルジットとライプチッヒの間の数年間のナポレオンによるプロイセンの圧政と侮辱に関する続く言及は、明白に完全にドイツ側に好意を持っているビッカーマンの立場を強く示していた。[50]

多くの苦難を共にする人々と同じように、1933年、もちろんただ限定的な安全ではあるが、それを提供することが可能であったフランスに彼は向かった。1942年から1946年まで、彼は、ニュヨークで、≪私立高等研究院≫（Ecole Libre des Hautes Etudes）の、ベルギーとフランスが占領された後に創設された支部の≪新社会研究所≫（New School for Social Research）で活動した。ビッカーマンは、＜アメリカ化の強制＞（J. Radkau）もなく、同僚たちが、自らの故国の学問の伝統を維持することが出来たこの有名な＜亡命者の大学＞（University in Exile）で単なる古代学者に留まってはいなかった。[51] アメリカ

で、この学者は輝かしい学問的経歴の成就のための前提条件を、また後に見つけたのであったが、その根拠については、言うまでもなく、四ヶ国語で（オリジナルで）示された発表論文が証明している。[52]

古代学の研究を、ビッカーマンは、1915年ペテルスブルクで、亡命という運命をビッカーマンと共有し、そして、彼の専門に、取り分け社会・経済史の領域に最も重大な影響を与えたミヒャエル・ロストフツェフ（Michael Rostovzeff）の下で始めた。[53] ベルリン大学で研究していた時期には、彼は、特にパピルス学者のウルリッヒ・ヴィルケン（Ulrich Wilken）に従っていた。パピルス学の諸研究から出発して、彼は、数多くの重要な研究、殊にヘレニズム史や古代の国法についての研究を発表した。[54] 彼の生き生きとしたユダヤ教信仰に対する関係から来るビッカーマンの途切れることのないユダヤ人の歴史の研究は、始まっていたユダヤ人迫害に面して特別な様相を帯びた。彼をユダヤ教学に結び付けている同時代史的背景は、反ユダヤ主義プロパガンダの古典的な二つの発端点、儀式的殺害の非難と愚者賛美の主張を跡づけている論考の中で既に明らかになっている。[55]

その点を最も明白に根拠づけているものは、やはり偶然ではなく、彼がドイツに亡命した後に著され、ドイツのユダヤ教との途切れることのない繋がりの標識と見做され得る二つのマカベア運動に関する1935年と1937年の書物である。[56] ビッカーマンが、このマカベア運動の歴史的成果から現代に至る弧を描いているとすれば、それは、他の点では冷静な学問研究の結論を超えたものである。＜マカベア運動とは、つまり、ギリシア時代のユダヤ教を、溶解してしまう前に、また凝固してしまう前に救い出したのだ。アブラハムの神、イサクの神、それにヤコブの神は、また我らのもとに留まり得給い、留まり給うと云うことがその運動の為したる業である。≪我が救いは、天地をお創りになった主から来たる≫（詩篇121）＞。[57]

オイゲン・トイブラー（Eugen Täubler）の人生には、古代史研究とユダヤ研究の結合が最もはっきりと表わされていた。[58] オットー・ヒルシュフェルト（Otto Hirschfeld）の弟子として、彼が1904年提出した『ヨセフスによるパルティア人の報告に関して』と云う学位論文で、既にその点は非常に明確に輪郭が示されていた。トイブラーは、ユダヤ研究の専門家集団のかなり若い層に数えられてよかったが、モムゼンの取り巻きで、＜ローマ研究＞に没頭していた。[59] 自ら

の研究を修めた後、彼によって創設されたドイツにおけるユダヤ人社会の歴史の≪ドイツ・ユダヤ総合資料館≫（Gesamtarchivs der Deutschen Juden）の所長に、彼は方向を変えた。[60] その他に、ベルリンにおける≪ユダヤ教学教育機関≫（Lehranstalt für die Wissenschaft des Judentums）の＜ヘレニズム・ローマ時代におけるユダヤ史＞のための講師職も、1910年から彼は引き受けた。[61]

第一次世界大戦後にやっと、トイブラーは本来の意味での学問的履歴への入り口を、ベルリン大学で古代史の私講師として見出したのであった。1922年、チューリッヒ大学に員外講師として行き、1925年にハイデルベルク大学に、アルフレート・フォン・ドマスツェフスキー（Alfred v. Domaszewski）の後任として、古代史講座職に招聘された。[62] 真剣に社会に関わるユダヤ人大学人の代表として、強制的解職に先んじて、1933年自らの教授職とハイデルベルク科学アカデミーの会員職を、彼は自らの意志で放棄するに至った。伝記に明白な言及がされている彼がユダヤ教に堅く根を下ろしていること以上に、トイブラーに大学との決別を倍も重く感じさせたドイツ文化に対する彼の肯定的な関係は無視されてはならない。[63]

国家官吏の職を辞した後、トイブラーは、1938年夏学期、もう一度ベルリンの≪ユダヤ教学教育機関≫に復帰し、そこで彼の教師活動を、その限られた範囲内で継続することが出来た。[64] 苦境の中で、大学にやって来たユダヤ人学生の殺到によって制約されてはいたが、この教育機関のプログラムは、全般的に、圧倒的に精神科学の専門諸分野に拡げられていた。[65] この、ドイツにおける最後のユダヤ人教育の場が閉鎖される一年前、―1942年までのそれの存続条件は、今日では殆んど想像不可能である―トイブラーはアメリカに亡命し、そして＜聖書及びヘレニズム文学の研究専門教授＞としてその地位を見出したのであった。≪アメリカ・ユダヤ研究アカデミー≫（American Academy for Jewish Research）の副会長に、1950年彼が選ばれたことは、オイゲン・トイブラーが、ユダヤ教学において占めているその重要さを明確に示している。[66]

彼のユダヤ教の文化世界との特に緊密な結びつきに由来する影響は、トイブラーの古代史の関心領域をも又はっきりと特徴づけていた。同時に当初から世界史的な考察方法の原動力は、こうした関係にあった。[67] モミリアーノ（A. Momigliano）が指摘していたように、トイブラーはローマ制度史のための彼の方法論的努力を

以って、モムゼン後の古代史家たちの中にあって特別な位置を占めている。[68] 1935年に、ゲルケ=ノルデン（Gercke=Norden）の『古典古代学入門』の中に著わされた論稿「ローマ人国家」が、―それはまた、狭い意味で古代史のトイブラーの最後の仕事が扱われていたが―略完全に無視されたままであったとすれば、その出版の時期と著者の個人的運命が、その場合ある役割を果たしていたのであろう。[69]

トイブラーが亡命するまで、ユダヤ人に対して狭く囲われた中で、ユダヤ人存在の根拠と現実の有様に関し自らの専門分野からどれほど真摯に取り組んでいたかを、モムゼンの『ローマ史』の「ユダヤとユダヤ人」の章に対する彼の後記が印象深く示している。[70] トイブラーが、この章を、その序で、＜ユダヤ人の歴史の最も上手く組み立てられたもの＞と見做していながら、同じ調子で、誰でも、＜本来の意味で、ユダヤ人の歴史について論じ得るのだ＞と、そこで強調しているのには、何よりもちぐはぐな気持にさせられる。[71] 彼は、＜ローマ帝政期の視点から＞のモムゼンの叙述の固有の価値を進んで高く評価しているのではあるが、しかし、全体的には、彼がユダヤ人の立場から提示している重大な様ざまな留保の方が勝っている。[72] ＜モムゼンにおけるユダヤ人の態度の無理解（das Nichtverstehenkönnen）＞の様ざまな要因は、トイブラーによれば、とどのつまりは、それに堅固に結びつくことなしに、ユダヤ教の歴史的形態に迫ろうとする他の全ての研究者にとっても又当てはまることなのである。[73]

トイブラーの解説は、この時代の驚くべきユダヤ人の自意識を露わにしている。それは、ナチスのユダヤ人政策によって益々強く自身に示されるユダヤ教徒であること（Judentum）の反応と理解されねばならない。それと共に、トイブラーは、モムゼンの考えに従って、＜あらゆる本質的事柄において、特に圧迫と迫害に直面した際に、＞宗教的共同体の強固な団結心を想起することに在るユダヤ民族の特異な能力に訴えている。[74] トイブラーのモムゼンとの対論は、エルンスト・ジーモンが、そこに、精神的抵抗の表出を正しく見ていた1933年以降のドイツにおけるユダヤ人の人間形成研究へ寄与するものであった。[75]

モムゼンの『ローマ史』のその章への後書きは、広範な基盤に基づく古代史研究から＜聖書研究＞へのトイブラーの移行を明白に示していた。54歳の年のハイデルベルク大学での活動からの無理な別れは、それと共に古代史専攻における大変成果豊かな教育、並びに研究活動の終わりを、この場合迫ったのである。―な

おドイツにおいてであるが―彼の1938年に計画されていたユダヤ聖書学のためのプログラムが示しているように、この研究課題に新たな故郷でも忠実であり続けると云うことに対する決定的な原動力となったものは、国内的な亡命経験（der inneren Emigration）の中に求められねばならない[76]。この時代に自らの職を失った彼の多くの同僚たちに可能であったよりも、オイゲン・トイブラーにおいては、かなり容易に課題を変更することを彼に可能とした特別の措置が、ドイツにおけるユダヤ人共同体との彼の密接な結びつきに基づいて提示されていたことを、もちろん無視してはならないだろう。

既にフリッツ・ハイヒェルハイム（Fritz Heichelheim）は、ドイツの若手歴史家世代の代表者であったが、1933年５月、僅か４年間のギーセン大学での教師活動の後に解職された。この措置は、ギーセン大学に、特別に功労のあったユダヤ人家族の身内にも適用された[77]。

1925年リシャール・ラケール（Richard Laqueur）の下で自らの研究を修めたハイヒェルハイムは、ドイツにおける古代経済史の数少ない専門家に属した[78]。近代国民経済学の問題提起を、その中に、彼が十分意識して取り上げていた『アレクサンドロスからアウグストゥスまでの時代における経済的変動』と云う教授資格取得論文によって、彼は知られるようになった[79]。H.G.グンデルが強調した彼に特有の総合への欲求から、『旧石器時代からゲルマン人、スラブ人、それにアラブ人等の民族移動に至るまでの古代経済史』[80]に、彼は初めに広告していたよりもいっそう広い範囲を含ませていた[81]。二巻の仕事の完成は、イギリスの研究助成金によってやっと可能となった。ハイヒェルハイムが、前書きに表明している亡命の最初の数年における支援への感謝は、数多くの友人や同僚たちに向かって語られていた。ドイツの古代学に向けては、彼は―それを、1938年に十分に語っていたのであるが―モムゼン、ニーブール、ヴィルヘルム・フォン・フンボルト、シュモラー、ヤーコプ・ブルクッハルト、それにアウグスト・ベッコー（August Böckh）の伝統に対する信奉を告白していた[82]。

ハイヒェルハイムは、イギリスの市民権をその間に獲得していたが、戦後、カナダで新たな出発に敢えて挑戦した。トロント大学で、彼は、ギリシア史、ローマ史の教授としてその生涯を全うしたのであった。ハイヒェルハイムは、彼のかつての大学との繋がりで再び迎え入れられることが1945年以後可能であったが、

しかし唯一人の亡命古代史家でずっと在り続けた。[83]

亡命の途を歩んだ一連の後進の学者たちの中では、彼の＜非アーリア系の＞夫人のためにハレ大学を去らねばならなかった私講師の**クレメンス・ボッシュ**（Clemens Bosch）が、やはり挙げられねばならない。[84] ボッシュは、取り分け碑文学専門家たちに知られていた。ヴィルヘルム・ヴェーバー（Wilhelm Weber）の提案で、ボッシュは帝政期小アジアの貨幣集成の仕上げに関わった。恐るべき数の素材を集めることは、ボッシュが1934年ドイツを去る時には既に終わっていたが、その後、その全部の計画は実質的に中断されねばならなかった。それまでに完成していた唯一の部分は、その中断で、非常に成果のあるものと評価されるプロジェクトが放棄されてしまったことを示している。[85]

ボッシュは、1935年トルコに行き、イスタンブール考古学博物館の碑文学専門家として彼の専門分野とずっと密接に結ばれていた。後に、1940年、彼はその地の大学の古代史教授職を授けられ、西欧の基準に従ったトルコの大学制度の組織化に、その立場で協力した。[86] この、やはりケマル・アタテュルクによって導入されたプログラムは、古代学の分野でも、大方ドイツ人亡命者によって担われたのである。[87] ＜人文学的伝統＞を欠いた土地において古代史学を始めるために、ボッシュは、自らの研究分野から、特別なやり方で宿命を負わされていた。[88] イスラム教への改宗を以って、ボッシュは、―その限りで、非常に珍しい亡命者の運命を、彼は体現しているが―彼が同化した国の文化と永続的に結びついたのであった。[89] 一部はトルコ語で発表されたボッシュの論稿は、彼がこの地域の歴史に存在している様ざまの可能性をただ利用するだけではなく、同時に、トルコに、生え抜きの＜古代史＞のための基礎を据えることに寄与したことを証明している。[90]

ナチスの権力掌握直後は、かなり多くの後の運命集団は、ローゼンベルク、シュタイン、ビッカーマン、トイブラー、或いはハイヒェルハイムを特例扱いしようとし、自分自身に対する亡命の動機を見ようとはしなかった。しかし、1935年までに、≪粛清≫の第二段階のための法的基盤が作られ、古代学は1933年までのそれよりも少なからず厳しい目に会った。解職と転属決定が、取り分けかなり高齢のものたち、つまり、大方の場合講座担当教授を襲った。[91] 粛清するのは、単に大学だけではなく、総じて学問研究機関であった。教職からの免職は、たいてい発表禁止を齎した。

このような状況下で、例えば、ミュンスター大学の古代史家**フリードリッヒ・ミュンツアー**（Friedrich Münzer）は、その専攻から追い出されるはめになった。[92] 1935年、なおミュンスター大学に＜名誉を保ちつつ＞、彼は退職させられた。彼のユダヤ系出自に因り、３年後ドイツの雑誌類に発表することを禁止されたが、そのことに、彼は酷く苦しんだのであった。あらゆる困難にもかかわらず、彼はパウリ＝ヴィソワ百科事典のための一連の論文を完成することが出来たのであるが、それは、数多くの友人たちの支援がなければ不可能であったであろう。彼は、1942年６月、47歳の年にテレージェンシュタットに送られ、そこで数ヵ月後に亡くなった。

ミュンツアーは、ベルリン大学では、モムゼンとヒルシュフェルトの弟子たちに属していた。古代史のテーマの学位論文の後、[93] 1896年バーゼル大学において古典文献学で、彼は教授資格を取得し、1912年まで同大学のラテン語部門を代表していた。その後、彼はケーニヒスベルク大学で古代史に移り、1921年、最後にミュンスター大学にやって来た。非常に早くから、百科事典のローマ共和政のプロソポグラフィーの編纂に、ミュンツアーは取り組んでいた。この資料と長期間取り組んだことから、彼を古代史家として有名にした彼の著作『ローマの貴族党派と貴族家族』が生まれたのである。彼の貢献が、現代の人物史的研究に、様ざまな決定的な刺激を齎したのであった。≪ミュンツアー学派≫をめぐる議論は、未だ終わっていない。[94]

公的理由に基づき、彼の講座は、＜他の講座目的＞に引き渡されねばならないとハレ大学古代史正教授**リシヤール・ラケール**（Richard Laqueur）は、1936年初め、定年になる遥か前に解職された。[95] この事例については、後でなお詳しく扱われる。[96] ここでは、個人的運命とこの専攻代表者の学問的動向にのみ注目する。

ラケールは、アルザス地方の旧家の出身であり、彼の弟子であるハイヒェルハイムの定義によれば、＜信念を持ったドイツ人気質＞と自認していた。この世代の多くの者と同じように、[97] 彼も、連隊長として終えた第一次世界大戦の前線経験によって後々まで影響されていた。ルール闘争に彼が活発に参加したことが、所轄当局によって、1945年以後、ハレ大学に彼が復帰することを拒む理由として挙げられていた。大学における≪粛清≫の当初には、ラケールは自らの人物調書に書き留めていたように、彼は、＜職業官吏再建法によって二重に、即ち、（一）

1914年８月１日以前に正教授に任用されていたために、（二）世界大戦に戦闘員として参加したが故に庇護されている＞と感じていた。戦争経験の特徴的なアピールは、解職前、ラケール世代の男たちを擁護するために期待をしばしば高めたが、新たな独裁者が権力を固めた後には、大学の領域だけに限らず聞き入れられず、顧みられないままだった。(98)

彼の青年期には、彼自身の証言によれば、自らバーゼルに訪ねたヤーコプ・ブルックハルトが彼に強い影響を与えていた。彼の実際の教師たちには、古代史家のノイマン（K. J. Neumann）、カイル（B. Keil）、並びに文献学者エドゥアルト・シュバルツ（Eduard Schwartz）等が挙げられねばならない。彼の主なる研究分野は古代の歴史叙述であって、彼は、取り分け史料批判的な歴史的観点の下でそれに従事していた。(99) 文化史に対する彼の関心の最もよく知られている例は、彼の長期間の活動の場であったギーセン大学において、1924年、彼がなした『ヘレニズム』というテーマの学長就任記念講演である。(100) 古代史専攻の彼の経歴が、強制解職によって突然直ぐに終わってしまうことになったハレ大学に、ラケールは、1932年初めに招聘された。(101) 彼は、アメリカに1939年に亡命したが、自身の専門分野と繋がったことも、相応しい活動分野で生活費を稼ぐ機会もそこでは見出せなかった。肉体労働を頼りにしながら、彼に余っている自由な時間だけ学問的関心事に、彼は専念出来たに過ぎなかった。使える専門的図書館も彼には全くなかったから、シェイクスピアの劇に取り組み、古代の歴史家と同じように資料分析的な考察を行なっていた。彼がドイツに戻ってから著した『シェイクスピアの演劇的構想』という書物の基礎を、こうした歳月に彼は築いていた。(102) 古代史家としては、ラケールは、20年間以上の中断後、亡くなる直前に、もう一度ディオドロスに関する論考で現われたのであった。(103)

ナチスの権力掌握後、大がかりに組織化されたドイツの大学の≪粛清≫は、実質的には1936年の初めまでに終わっていた。しかし、なお暫くそれは継続したが、その訳は、取り分け外側にまで達したドイツの大学の画一化を引き続き守るためであり、その際には、解職理由は、全く個々のケースに合わせられていた。ケルン大学では、このやり方で、古代経済史の著名な代表者であった**ヨハンネス・ハーゼブレック**（Johannes Hasebroek）が、1938年、45歳の年に中傷の犠牲者として退職させられた。公的には、退職は病のせいにされた。(104)

ケルン大学の新たな理由づけによれば、ハーゼブレックは、ヨーゼフ・クロル（Joseph Kroll）によって創設された古代学科のその専攻の最初の代表者として招かれた。[105] ケルン大学の経済及び社会学の特別な伝統により、経済史的傾向の強い古代史家の招聘は、明らかに全く偶然ではなかった。[106] フォン・ドマスツェフスキーの弟子であったハーゼブレックは、何よりもヒストリア・アウグスタ研究に対する様ざまの貢献で頭角を現した。[107] ベロッホ（Karl Julius Beloch）、それにエドゥアルト・マイヤーが、国民経済学者カール・ブッヒャー（Karl Bücher）と古代の経済形態の特質をめぐって争った議論が、経済史に対する彼の仕事と関連して再び燃え上がった。ハーゼブレックは、その当時、条件付きでブッヒャーの側であると表明していた。[108] 提起されているテーゼに対する、時にこじつけ的なあらゆる批判にもかかわらず、彼の最も激しい批判者の一人、エーリッヒ・ジーバルト（Erich Ziebarth）自身、ハーゼブレックのこの分野での一定の功績を認めざるを得なかった。[109] ハーゼブレックの解職は、彼の学問的な生産の終わりと重なり、[110] 古代社会経済史に大変責任を負っていると感じていたハイヒェルハイムの出国後には、こうした研究方向のいっそう手痛い弱体化を意味したことは全く疑いないことである。

オーストリアの併合とチェッコスロバキアの分割後に、新たな迫害の波が起き始めた。グラーツ大学の古代史家であり、碑文学とパピルス学の専門家**フランツ・シェール**（Franz Schehl）が、その波の最初の犠牲者となり、彼は1939年４月休職させられたのであった。[111] この波の吸い込みに、プラハ・ドイツ大学、古代史講座担当者**ヴィクトル・エーレンベルク**（Victor Ehrenberg）も、結局飲み込まれた。ドイツ軍のプラハ進駐直前に、≪科学及知識擁護協会≫（Society for the Protection of Science and Learning）の援助で、英国への出国に彼は成功した。[112] 彼の夫人の思い出は、大きなユダヤ人運命共同体と云う強い自覚の中で、迫害の圧力に晒されたドイツのユダヤ人家族の際立った結束が、どのように変貌したかを印象深く証明している。[113]

個人的に困惑の気配がなかった訳ではないが、エーレンベルクは、1927年にドイツ人古代史家として、＜古代の反ユダヤ主義の問題は、全く意外なことに現代のそれと関連しているのである。アレキサンドリアが、ユダヤ人問題を抱えていたならば、それは、例えば、今日のヴィーンとあまり変わらないのだから＞とはっ

きり語っていた。[114] かなり後の、専らギリシア史に捧げられた様ざまの仕事でも、自らがプラハでその証人と犠牲者になったドイツにおける政治動向の分析が一つの役割を果していた。彼は、1934年、彼のスパルタ像の変遷を語っていたラジオ放送講演で、例えば全体主義的国家の本質的定義にスパルタを挙げることをしていた。[115] 亡命後には、戦時第一年の印象の下で、アレクサンダー大王についての講演は、ヒトラーの責任を追及することになり得たのであった。[116] その上、亡命は、彼のかつての故国と新たな故国の夫々の古代学の伝統間の広範な交流現象の前提条件を生み出したのであり、それが、エーレンベルクの活動の中に実り豊かな結びつきを成り立たせていた。即ち、アーンスト・ベーディアン（Ernst Badian）が述べているように、＜ドイツ的構成要素が、具体的な事実へのイギリス的留意とブレンドされている＞ような精神史の強調である。[117]

かつてのプラハにおけるエーレンベルクのローマ古代史と碑文学の同僚、**アルトゥール・シュタイン**（Arthur Stein）は、―彼は、その当時68歳であったが―年金付き退職をさせられた。[118] ヘルマン・デッサウ（Hermann Dessau）に対する追悼文の中の彼の控え目な言及は、シュタインが、ユダヤ人大学教師たちの特殊な立場に対してはっきりした感情を抱いていたことを証明していた。[119] 彼は、その人生の最後にドイツにおける凝縮された反ユダヤ主義を我が身で体験することになった。その非凡な活力のお陰で、彼はテレージェンシュタット強制収容所で３年半持ち堪えることが出来たのであった。

彼の学問的経歴は、碑文学者オイゲン・ボルマン（Eugen Bormann）の影響下にあった。彼は、碑文史料に数多くのプロソポグラフィッシュな研究の基盤を認めていた。際立っているのは、『騎士階級』と云うモノグラフであるが、その書物で、シュタインは、モムゼンとフリートレンダー（Friedländer）、それにヒルシュフェルトの諸研究を自覚的に結びつけていた。[120] ナチス時代のオーストリアでは、その仕事の可能性が著しく限られていた彼の友人、エドゥムント・グロォク（Edmund Graog）と共に、[121] 彼は、帝政期の人物史にとって最重要な補助手段の一つである、『プロソポグラフィア・インペリ・ロマーニ』（*Prosopographia Imperii Romani*）の全般的な改訂に最後に着手したのであった。[122] シュタインとグロォクの最後の仕事を戦争が終る前に公刊することが、原稿が秘かに届けられたハンガリーの友人や同僚たちの為すべきことだった。[123] 1945年

以降に、シュタインはプラハに戻り、その地でなお数年間学問研究に従事したのであった。

第２節　ドイツ古代学の＜亡命による損失＞

古代史について記された局面で、古典文献学の≪粛清≫も又終わったのであるが、その規模を、ここでは僅かな名前を以って示すことが出来るに過ぎない。[124] 亡命の運命に、この専門分野の名だたる代表者たちが与ったのである。即ち、ルードヴィッヒ・ビーラー（Ludwig Bieler）、エドゥアルト・フレンケル（Eduard Fraenkel）、パウル・フリードレンダー、クルト・フォン・フリッツ（Kurt von Fritz）、フェーリックス・ヤコビー（Felix Jacoby）、ヴェルナー・イェーガー、エルンスト・カップ（Ernst Kapp）、パウル・マース（Paul Maaß）、エドゥアルト・ノルデン、ルドルフ・プァイファー（Rudolf Pfeiffer）それにゲオルク・ローデ（Georg Rohde）等々である。[125] 早期に退職させられた者（国内亡命も含めて）たちには、クルト・ラッテ（Kurt Latte）、カール・ムラス（Karl Mras）、オットー・レーゲンボーゲン（Otto Regenbogen）、それにコンラート・ツィーグラー（Konrat Ziegler）を挙げることが出来よう。[126] この一連の者に加えるとすれば、つまり私講師という出発点にあった学問的次世代の者たち、例えばヘルベルト・ブロッホ（Herbert Bloch）、ルードヴィッヒ・エーデルシュタイン（Ludwig Edelstein）、エルンスト・グルマッハ（Ernst Grumach）、フリードリッヒ・ヴァルター・レンツ（Friedrich Walter Lenz）、アイルハルト・シュレジンガー（Eilhard Schlesinger）、オットー・スクッチュ（Otto Skutsch）、フリードリッヒ・ゾルムセン（Friedrich Solmsen）それにシュテファン・ヴァインシュトック（Stefan Weinstock）等々である。[127]

これらのケースでもまた、学界からの辞去は、学界消息の簡単な式文に限られなければならなかった。例外は、ただヴェルナー・イェーガーだけであった。恐らく、彼の国際的な声望を顧慮して、帝国文部大臣は、シカゴ大学への彼の招聘の機会に、彼に対して、＜彼の学問的活動に対する称賛の言葉と同時に、招聘の受諾に承認を与えた＞と報告する義務を感じたのである。[128] イェーガーの特別な立場は、また後で考察される。1941年の秘密新聞指令によれば、イェーガーに言及する際には、＜最高に慎重であること、新聞・雑誌、文化報道課（Abteilung

ZP, Kulturpresse）との事前の相談＞を命じていた。[129] こうした表現の規制は、もちろん又、＜第三ヒューマニズム＞との関連を背後に見ることが出来る。[130] 権力掌握に対するイェーガーの反応は、必ずしも全ての亡命者たちが、ナチズムに対して初めから無条件に反対の立場を占めていた訳ではなかったことの、確かな実例である。[131]

亡命への道に、結局、古典考古学者である、マルガレーテ・ビーベル（Margarete Bieber）、オットー・ブレンデル（Otto J. Brendel）、パウル・フェルディナント・ヤーコプスタール（Paul Ferdinand Jacobsthal）、ゲオルク・カロ（Georg Karo）、カール・レーマン（Karl Lehmann）、それに若い世代では、ゲオルク・ハンフマン（George M. A. Hanfmann）、とウイリー・シュババッハー（Willy Schwabacher）等々が加わらねばならなかった。[132] 古代法史の分野でも、同じ運命を、エルンスト・レビー（Ernst Levy）、フリッツ・プリンクスハイム（Fritz Pringsheim）、エルンスト・ラベル（Ernst Rabel）、それにフリッツ・シュルツ（Fritz Schulz）が歩み、同様に、彼らのかなり若い同僚、ダービッド・ダウベ（David Daube）そしてハンス・ユーリウス・ヴォルフ（Hans Julius Wolff）等は、広い意味で古代学者と見做され得る。[133]

勇気ある行動や同僚の側からの連帯の徴とか援助の手とかは、個々のケースで確かに無くはない。しかし粛清の波に対する専門仲間たちの纏まった反応は問題にならない。1934年、アドルフ・ヒトラーに誓約を拒み、２年後、その務めが永続的な休職に換えられたロストック大学の古典ギリシア語学者、クルト・フォン・フリッツの妥協を知らない姿勢は例外に留まった。[134] 大学で粛清の犠牲に遭遇した人間的苦るしみを、全面的に言葉で理解せしめるのはなかなか難しい。そこに学問の歴史を認めなければならないこの章の各所の様ざまな例証が、自ら語り、それ以上のいかなる解説も不要である。これらの一連の個々の運命の背後に学問的可能性が存在し、その損失は、1945年を超え、古代史専攻の動向に決定的に影響を与えたのであった。その場合、ユダヤ人学者の業績と学問的亡命を全体的に過大に評価する危険に圧倒されることもなく、誰でもこうした確信に至るであろう。[135]

ドイツの亡命による損失は、―学術施設から排除されたままにされると云う極端なケースはさて措くとして―他方で、一定の前提条件の下で、個々の専門分野にとって有益であると受け入れた国々においては重要であったであろう。専門特

有に見られるこの純粋に肯定的側面も、我われの文脈においては、その個々の亡命者が払わなければならなかった高い代償と同様に見落とされてはならないだろう。古代学の分野で罷免された大学教師たちの大方は様ざまに異なる前提に基づいた、人種立法の犠牲者であった。彼らの政治的コミットの所為で危険に晒され、しかし又、人種的な理由でも危険に晒されたアルトゥール・ローゼンベルクやエルンスト・シュタインは例外的現象に数えられた。

当該の者たちの内、若干の者は、専門分野から、古代的及び近代的形式を含めて、反ユダヤ主義の問題に特に敏感になっていた。全体から見れば、ユダヤ人学者たちの諸々の仕事は、—信仰共同体に結びついているかどうかは別として—ユダヤ人以外の彼らの同僚たちのそれらと見分けられない。宗教的に束縛されていると云う意味でのユダヤ人たちは、その場合、ただ集団としてその限りでより強い性格を獲得し、ユダヤ教学との接点を求め、更にユダヤ研究と古代学研究とを密接に結びつけるのである。孤立し、排除されているこの集団の専門特有の反応を、ビッカーマンやトイブラーの諸々の論稿は表している。こうした集団の人々の排除と共に、事実、ドイツ古代学の固有の意味でのユダヤ的構成部分が絶やされてしまった。第三帝国では、イスラエル史研究には、世界観的理由が邪魔をしていたと云うことを度外視しても、ギリシア・ローマ古代のこの接触部分との専門的な議論は、今や人的にも制約されてしまった。同様に、古代社会経済史の著名な代表者たちは、自らの研究を最早進めることが不可能であると云うことによって、直ちに教育並びに研究機関は困惑させられたのであった。こうした状態は、一定の分野にとっては、長期間にわたって後進の育成を損なうに違いなかった。専門的研究計画の中断と妨害によって、結局どのような期待が潰え去ってしまったのかは、個々に測れるわけではないが、しかしそれにもかかわらず、こうした＜学問的に消極的な評価＞の中で言及されるに違いない[(136)]。

古代学者たちの相対的に最大のグループは、かなり多くの通過駅の後、沢山の亡命者たちに最も安全な将来と、受け入れ能力から最良の可能性を提供したアメリカに向かった。学問的亡命者の中でアメリカに渡ったものについて、ヘルゲ・プロスは、1955年に比較的肯定的な評価、即ち、＜古典文献学と古代史のための教師職は、・・・今日、大きな大学では、大方中央ヨーロッパの亡命者たちが占めて＞おり、＜取り分け、彼らの専門分野の発展が、拡充と強化という意味にお

いて、生産的にした・・・＞と云う肯定的評価を引き出していた。[137] コロンビア大学の例では、そこには、ビッカーマン、ビーベル、ブレンデル、クルト・フォン・フリッツ、それにカップ等々が古代史専攻、考古学専攻、それに古典文献学専攻を代表しており、この確認が印象深く証明されていたが、この事例とは別に、この点は、多分もっと多くの根拠に基づき認められるに違いない。[138]

更なる拡充が意味あるとは思えない程に、古代学者たちのグループが、既に確固として大学組織に根を下ろしているイギリスのような国では、都合良く昇進する機会はかなり僅かしかなかった。[139] 言及されている特別のケースとしては、トルコの大学組織の強化に際して、古代学者に対しても現われた機会が指摘されるに違いない。[140] 亡命した古代学者たちの大部分は、個々に非常に様ざまに異なった条件の下で、専門との繋がりを再度見つけたのであるが、この過程が、曲折を経ずに進展することは、もちろん決してなかった。

専門と結びついた、亡命には典型的な展開が確かにそこでは検証されるが、独裁と亡命の辛い経験が学問的仕事に移し換えられていた。その点の手掛かりが、全体主義議論に対していわば古代史家の寄稿を寄せていたヴィクトル・エーレンベルクやクルト・フォン・フリッツに認められる。[141] 個々の学者の仕事における亡命によって引き起こされたナショナルな学問の伝統の融解過程は、手掛かりを掴むのが難しい。このような意味に、エドゥアルト・フレンケルの仕事は解釈されたのであった。即ち、＜しかし、彼の影響は、他のどんな要素よりも、ドイツの≪古代学≫とイギリスの古典学の両者の内の最良のものの多くを結びつけている混合物をともかく創造したことであった＞。[142] こうした展開の内に存在している可能性は、亡命の一時的な枠を超えている。もし、亡命後の帰国の機会を考えるならば、更に二重の相互交流過程が始められるのである。[143]

ドイツの古代史研究分野では、古典文献学とは異なって、亡命損失は、どんな事例においても、この方法で埋め合わせられなかった。[144] 戦争終了後も生き延びた亡命古代史家たちの誰ひとり、彼の以前のポストに復帰したり、同等の地位を他のドイツの大学に見つけることの出来た者はいなかったと云う事実以上に、この専門分野の歴史における断絶をよりはっきり見せているものは何もないだろう。

附録

ドイツ帝国における古代史講座教員配置（1933－1945）

・Berlin大学
　Wilhelm Weber（1932－1945）

・Bonn大学
　Friedrich Oertel（1929－1953）

・Breslau大学
　Ernst Kornemann（1918－1936）
　Joseph Vogt（1936－1940）
　Alfred Heuß（1941－1945）

・Erlangen大学
　Adolf Schulten（1907－1935）
　Wilhelm Enßlin（1936－1943）
　Johannes Straub（1944－1948）

・Frankfurt大学
　Matthias Gelzer（1919－1955）

・Freiburg i. Br. 大学
　Walter Kolbe（1927－1943）
　Joseph Vogt（1944－1945）

・Gießen大学
　Fritz Taeger（1930－1935）
　Kurt Stade（1936－1941）
　Franz Hampl（1942－1945）

・Hamburg大学
　Erich Ziebarth（1919－1938）
　Hans Rudolph（1939－1974）

・Heidelberg大学
　Eugen Täubler（1925－1933）
　Fritz Schachermeyr（1936－1940）
　Hans Schaefer（1941－1961）

・Jena大学
　Fritz Schachermeyr（1931－1936）
　Hans Schaefer（1936－1941）
　Herman Bengtson（1942－1945）

・Kiel大学
　Hugo Prinz（1915－1934）
　Paul L. Strack（1935－1941）

・Köln大学
　Johannes Hasebroek（1927－1938）
　Lothar Wickert（1939－1966）

・Königsberg大学
　Oscar Leuze（1921－1934）
　Lothar Wickert（1935－1939）
　Kurt Stade（1941－1945）

・Leipzig大学
　Hermut Berve（1927－1943）

・Göttingen大学

Ulrich Kahrsted（1921－1952）

・Greifswald大学

Josef Keil（1927－1936）

Hans Volkmann（1937－1945）

・Halle大学

Richard Laqueur（1932－1936）

Franz Altheim（1938－1945）

・Rostock大学

Ernst Hohl（1919－1950）

・Tübingen大学

Woldemar Graf Uxkull-Gyllenband（1932－1939）

Joseph Vogt（1940－1944）

・Würzburg大学

Joseph Vogt（1929－1936）

Alexander Graf Schenk von Stauffenberg（1936－1941）

Wilhelm Enßlin（1943－1952）

・Prag大学

Arthur Stein（1918－1939）

Victor Ehrenberg（1929－1939）

Willy Hüttl（1941－？）

・Marburg大学

Anton v. Premerstein（1916－1935）

Fritz Taeger（1936－1960）

・München大学

Walter Otto（1918－1941）

Hermut Berve（1943－1946）

・Münster大学

Friedrich Münzer（1921－1935）

Hans Erich Stier（1936－1968）

・Graz大学

Wilhelm Enßlin（1930－1936）

Franz Schehl（1936－1938）

Fritz Schachermeyr（1940－1945）

・Innsbruck大学

Franz Miltner（1933-1945）

・Wien大学

Josef Keil（1937－1952）

・Posen大学

Friedrich Vittinghoff（1943－1945）

・Straßburg大学

Alexander Graf Schenk von Stauffenberg（1942－1945）

註

第１章　大学の＜粛清＞と古代史専攻

(1) Christopf Weiszによって、６人のミュンヘン大学の歴史家に関して、それが為されたように、仮説とは、その方法において、何らかの史料の選別評価であろう。Christopf Weisz, *Geschichtsauffassung und politisches Denken Münchener Historiker der Weimarer Zeit*, Berlin 1970を参照。大学教員全般に向かっているのは、Klaus Schwabe, *Wissenschaft und Kriegsmoral. Die deutschen Hochschullehrer und die politischen Grundfragen des Ersten Weltkrieges*, Göttingen 1969、Herbert Döring, *Die Weimarer Kreis. Studien zum politischen Bewußtsein verfassungstreuer Hochschullehrer in der Weimarer Republik*, Meisenheim 1975〔＝Kreis〕、及び、同、Deutsche Professoren zwischen Kaiserreich und Drittem Reich, *Neue Politischer Literatur* 19, 1974, 340-352 (Literaturbericht)。今なお、Günther Ramhardter, *Geschichtswissenschaft und Patriotismus. Österreichische Historiker im Weltkrieg 1914-1918*, München 1973を参照。

(2) Karen Thiessenhusen, Politische Kommentare deutscher Historiker zur Revolution und Neuordnung 1918/19, *Aus politik und Zeitgeschichte*, B 45/69. 8.11.1969に所収、12, 註103。彼女は、Gustav Wolf (1865-1940)とHans Rothfels (1891-1976)の近代史家の説を挙げている。

(3) Michael Stürmer, Bismarck-Mythos und Historie, *Aus Politik und Zeitgeschichte*, B 3/71. 16. 1. 1971に所収27。

(4) この点は、Döringによる、平和主義者と社会主義者を除いて＜ヴァイマル共和国の〔穏健主義者〕と味方＞とそこで理解されていた者たちの入念に作られた資料リスト、Kreis, 256-260の分析から疑いなく明らかであった（この研究の前提については、同書、124ff. 参照)。唯モムゼンの弟子、Otto Hirschfeld（16. 3. 1843-27. 3. 1922）は、1917年と1920年、このグループの決議に署名をした。又、≪国家制度に対するドイツ大学教員の信奉、1920≫も、このグループのものだった（同書、257f.)。Ernst Kornemannの追悼文を参照、*Bursians Jahresberichte* 202, 1924, 104-116。この複雑さについては、今なお、Hans Schleier, *Die bürgerliche deutsche Geschichtsschreibung der Weimarer Republik*, Berlin 1975を参照。

(5) Döring, Kreis, 235.

(6) K. Christ, *Von Gibbon zu Rostovzeff. Leben und Werk führender Althistoriker der Neuzeit*, Darmstadt 1973〔＝Gibbon〕91を参照。

(7) K. Christ, Zur Entwicklung der Alten Geschichte in Deutschland, *Geschichte in Wissenschaft und Unterricht*. 10, 1971, 577-593.〔＝Entwicklung〕580に所収、及び参照。又、同、Gibbon, 286-333, 特に、290ff. を参照。更に、Hans Marohl, *Eduard Meyer-Bibliographie. Mit einer autobiographischen Skizze und der Gedächtnisrede von Ulrich Wilcken*, Stuttgart 1941。マイヤーの関わりの証明は、Döringも又提示している。Kreis, 266.

(8) Christ, Entwicklung, 580.

(9) Wilamowitzについては、Uvo Hölscher, *Die Chance des Unbehagens*, Göttingen 1965, 7-30を参照。今なお、Luciano Canfora, Wilamowitz e Meyer tra la sconfitta e la 〈Repubblica di Novembre〉, *Quaderni di storia* 3, 1976, 69-94も参照。

(10) Arthur Rosenberg (19. 12. 1889/Berlin－7. 2. 1943/New York). 彼については、Helmut Schachenmayer, *Arthur Rosenberg als Vertreter der historischen Materialismus*, Wiesbaden 1964, と Hermut Berding, Arthur Rosenberg, H. U. Wehler Hg., *Deutsche Historiker* IV, Göttingen 1972, 81-96に所収、及び参照。〔訳者註、邦訳；ドイツ現代史研究会訳『ドイツの歴史家』1985 東京、第５巻所収〕。

(11) Francis L. Carsten, Arthur Rosenberg: Ancient Historian into Leading Communist, *Journal of Contemporary History* 8, 1973, 64 (63-75)は、Hans Rosenberg (Berkeley) の情報を支持している (同書、註１)。

(12) Döringによるこの周辺集団を局限するあらゆる弁護は、この確認とは異なっていることが指摘されねばならない。Kreis, 130f. それと共に、Hans Peter Bleuel, *Deutschlands Bekenner. Professoren zwischen Kaiserreich und Diktatur*, Bern 1968, の、この集団を強調し過ぎている帰結は修正される。

(13) Kurt Sontheimer, Die Haltung der deutschen Universitäten zur Weimarer Republik, in: Universitätstage 1966, Veröfftlichung der Freien Universität Berlin, *Nationalsozialismus und die deutsche Universität*, Berlin 1966, 35.

(14) Laetitia Boehem, Johannes Spörl Hg., *Ludwigs-Maximilians-Universität 1472-1972*, Berlin 1972, 231-243.

(15) Christによる証明は、Gibbon, 265f. 及び、A. Momigliano, K . J. Beloch, in: *Dizionario Biografico degli Italiani* VIII, Rom 1966, 13f. ならびにE. Breccia, *Uomini et Libri*, Pisa 1959, 231-243。

(16) Werner Jochmann, Die Ausbreitung des Antisemitismus, Werner E. Mosse Hg., *Deutsches Judentum in Krieg und Revolution*, Tübingen 1971に所収、490 (409-510)。Kahrstedについては、Ernst Meyer, *Gnomon* 34, 1962, 428-431を参照。

(17) Jochmann, 490f.

第１節　政治的、人種的犠牲者としてのドイツの古代史家たち（1933－1945）

(18) Karl Theodor Schäferによる関連諸法規の編纂は、*Verfassungsgeschichte der Universität Bonn* 1818-1960, Bonn 1968, 216ff. 更に、Wolfgaung Scheffler, *Judenverfolgung im Dritten Reich*, (Zur Politik und Zeitgeschichte H. 4/5), Berlin 1964, 32を参照。

(19) この点については又、Christian v. Ferber, *Die Entwicklung des Lehrkörpers der deutschen Universitäten und Hochschulen 1864-1954*, Göttingen 1956, 143ff. が扱っている。そして、Alexander Busch, *Die Geschichte des Privatdozenten*, Göttingen 1959, 156ff. は、それ以上ではない。－ Deutsche Forschungsgemeinschaft〔DFG〕によってなされた重点プログラムの枠内の、≪亡命と追放研究≫は、差し当たり基本的な便覧に仕上げられている。例えば、＜ドイツ語圏亡命者の伝記的便覧＞では、大学での亡命にも考慮がなされている。一般的な研究状況に関しては、Jan Hans＝Werner Roder, Emigrationforschung, *Akzente* 20, 1973, 580-591。

(20) 筆者は、ここで、取り分け亡命者たちの主要受入国の文書館や図書館における関連せる存在資料が有効に利用されるべき専門的研究の使命を理解したのであった。

(21) この点については、Joachim Radkau, *Die deutsche Emigration in den USA*, Düsseldorf 1971, 13を参照。彼は、亡命の影響に関して公けにされているものに見る、＜楽天的で、称賛的＞調子について述べている。

(22) Christ, Entwicklung, 583f. の留意は、全く、例外と見做されなければならない。この課題に対しては、A. Momigliano, *Studies in Historiography*, London 1966, 253　及び M. I. Finley, *The Use and Abuse of History*, London 1975, 76f.の留意も参照。第一級の手引き書、S. Kanzelson Hg., *Juden im deutschen Kulturbericht. Ein Sammelband, Richard Willstatter*の前文付, 3. Aufl., Berlin 1962は、その最初の稿（1934年）はユダヤ人迫害に対する反発として提示された成果であることを示している。Leonore Goldschmit, Klassische Philologie（333-337）とCarl Misch、Erforscher der Antike（364-365）の短い論考は、互いにすり合わせてはいず、1933年以前に対しても、異なったままである。近年、

A. Momiglianoが、*Encyclopaedia Judaica-Year Book* 1974（イベントは、1973年），223-225、Jews in Classical Scholarshipと云う中身の濃い論考の中で、ヨーロッパとアメリカの展開を含めて、この線を更に広げている。

(23) 公文書館の保護決定等々に対しても、この点は変わらない。

(24) *Gnomon* 9, 1933, 400及び、*Klio* 27, N. F. 9, 360f. を参照。教授資格を、E. Bickermannは1933年９月２日、A. Rosenbergは1933年９月24日に剥奪された。Johannes Asen, *Gesamtverzeichnis des Lehrkörpers der Universitat Berlin*, Bd. 1, Leipzig 1955, 15, 162, 更に、Schachenmayer, 前掲書（註10)、32を参照。F. M. Heichelheimは、1933年５月７日解雇された。*Ludwigs-Univ.-Justus-Liebig-Hochschule 1607-1957*, Giesen 1957, 464 (Chronik) を参照。

(25) この点については、例えば、*Gnomon* 9, 1933, の人事報告、及び、*Klio* 27, N. F. 9, 360f. を参照。

(26) A. Rosenberg, Trozki, Cohn und Breslau, *Die Weltbühne* 29, 1933, H. 1, 13-15. ――同様の方向を、Treitscke und die Juden, *Die Gesellschaft* 7, 2 1930, 78-83も示していた。Schachenmayer, 前掲書、(註10)、30f. 及び、F. L. Carsten, 前掲書（註11)、72を参照。
――ローゼンベルクは、（プロテスタントで）洗礼を受けたので、彼におけるユダヤ教信仰との元来の関係については示されていない(同書)。

(27) Schachenmayer, 前掲書（註10)、32。

(28) E. J. Gumbel Hg., *Freie Wissenschaft. Ein Sammelbuch aus der deutschen Emigration*, Strasbourg 1938, 207-213に所収。

(29) 同書、213。

(30) ローゼンベルクの自己評価に関しては、E. J. Gumbel、同書、276-279の自伝的スケッチ Arthur Rosenberg、277を参照。更に、*Demokratie und Klassenkampf im Altertum*, Bielefeld 1921（=Bücherei der Volkshochschule)。彼は、同様のモチーフを、*Geschichte der römischen Republik* Leipzig 1921（=Aus Natur und Geisteswelt, Bd. 838）に対しても用いていた（同書）。ローゼンベルクは、*Untersuchungen zur römischen Zenturienverfassung* と云う論文で、オットー・ヒルシュフェルトとエドゥアルト・マイヤーの下で、ベルリン大学で1911年学位を授与された。教授資格論文は、続いて1913年、*Der Staat der alten Italiker. Verfassung der Latiner, Osker und Etrusker* と云うテーマであった（1913年、ベルリン大学)。Schachenmayer, 前掲書（註10)、173ff. の文

献目録を参照。

(31) Berlin 1921. これについては、Carsten, 前掲書（註11)、64. Schachenmayer, 前掲書（註10)、16、並びに、意見の異なっている、Christ, Gibbon, 246 の註176を参照。

(32) E. Gumbel, 前掲書（註30）の自伝的スケッチ、277を参照。

(33) *Rheinisches Museum*. N.F. 82, 1933, 339-361に所収。

(34) この点に関しては、様ざまの講義予告に見本を参照することが出来る。例えば、＜Griechische Geistesgeschichte vom materialistischen Standpunkt＞（1923年夏学期)、＜Die sozialen Kämpfe im alten Rom＞（1924年夏学期)、＜Geschichte des Sozialismus und sozialen Frage im Altertum＞（1930/31年冬学期)。更に、彼は、通例では、そのテーマを展開する講義と演習では、古代史の全領域を論じていた。Friedrich-Wilhelms-Universität Berlin. 講義目録、1922ffを参照。

(35) Schachenmayer, 前掲書（註10）32を参照。彼の生涯の滞在地に関しては、註30の自伝的スケッチ、276参照。それによれば、**1914年ベルリン大学・古代史私講師、1930年同大学・員外教授、1933年解職、1937年国籍剥奪、1938年ニューヨーク・ブルックリン・カレッジ教授。**

(36) E. Stein (19. 9. 1891/Jaworzno-Galizien－25. 2. 1945/Fribourg). シュタインに関する伝記的事項は、他に示されていない場合、J.-R. Palanqueに全面的に拠っている。La vie et l′ oeuvre d′ Ernest Stein. E. Stein, *Histoire du Bas-Empire*, Bd. 2, Paris 1949, VII-XXII（文献目録付)、及び、O. Gigon, Ernst Stein, *Neue Züricher Zeitung*, 10. 3. 1945, Bl. 2に所収。

(37) Aurel Stein (1862-1943). A. Steinの諸出版物に関しては、in: *Journal of the Asiatic Society* 1946, 86-89を参照。

(38) E. Stein, L. M. Hartmann, *Vierteljahresschrift für Sozial-und Wirtschaftsgeschichte* (＝VSWG), 18, 1925, 313 (312-322), 及び、J. -R. Palanque IX f. を参照。－ハルトマンは、無宗派であり、更に、1901年以来、社会民主党に参加していたが故に、1920年にやっと教授になった。Herbert Dachs, *Österreichische Geschichtswissenschaft und Anschlus 1918-1930*, Wien 1974, 173 (172-181) を参照。

(39) E. Stein, *Die kaiserlichen Beamten und Truppenkörper im römischen Deutschland unter dem Prinzipat*, Wien 1932（E. Ritterlingの遺稿を利用している）を参照。

(40) 1931年、彼は員外教授に任命された。Asen, 前掲書（註24)、192を参照。

(41) *Le Flambeau* XV, 2 1932, 129-146に所収。Palanque, VIIIは、G. Hellseherを以って、

シュタインのアイデンティティーを解明している。

(42) Stein, Projecteur, 129を参照。

(43) 同記事、141ff. を参照。－この点については、ブリューニングの好意的な性格描写にも相応しい（140)。

(44) 同記事、140, 146。

(45) N. G. Mavris, La〈préhistoire〉d'Henri Grégoire, *Le Flambeau* 47, 1965, 302 (293-303).

(46) Jeanne Stein, Avant-Propos, E. Stein, *Histoire du Bas-Empire*, Bd. 2, Paris 1949, XXIII-XXXIIに所収。及び、André Piganiol, La method historique d' Ernest Stein, *Scripta Varia A. Piganiol*, Bd. 3, Brüssel 1973, 377-384に所収。

(47) E. Bickermann (geb. 1. 6. 1897). 同、*Das Edikt des Kaiser Carcalla*, P. Giss. 40, Phil. Diss. Berlin 1926, 39（経歴）に所収、及び参照。

(48) *Die deutsche Nation* 7, 1925, 129-132. この雑誌の綱領には、ヴェルサイユ条約の改正が入っていた。Peter Krüger u. Erich J. C. Hahn, Der Loyalitätskonflikt des Staatssekretärs Bernhard Wilhelm von Bülow im Frühjahr 1933, *Vierteljahrshefte für Zeitgeschichte*（＝VfZ）20, 1972, 404 (376-410) を参照。

(49) Bickermann, 同論文、129。

(50) 同論文、131f.。

(51) 〈New School〉と〈Ecole Libre〉の動向に関しては、Helge Pross, *Die deutsche akademische Emigration nach den Vereinigten Staaten 1933-1941*, Berlin 1955, 51f., 更に、Monika Plessner, Die deutsche 〈University in Exile〉 in New York und ihr amerikanischer Gründer, *Frankfurter Hefte* 19, 1964, 181-186更に、Joachim Radkau, 前掲書（註21)、35fを各参照。

(52) 彼の人生における最も重要な滞在地。1929年-33年ベルリン大学私講師、1933年-40年Ecole Pratique des Hautes Etudes教授、1937年-42年Forschungstipendium Centre National de la Recherche、1942年-46年 New School…及びEcole Libre…教授、1946年-50年 Forschungsstipendium Jewish Theol. Sem. (N.Y.)、1950年-52年 客員教授 Univ. Judaism、1952年-67年（名誉教授）コロンビア大学古代史教授。*Directory of American Scholars*, Bd. 1, 5. Aufl., New York 1969, 38を参照。

(53) 彼については、Christ, Gibbon, 334ff. を参照。

(54) 学位論文（註47）の他に、大規模なBeiträge zur antiken Urkundengeschichte, *Archiv*

für Papyrusforschung VIII及びIXに所収、更に、*Institutions des Seleucides*, Paris 1938を各参照。ここには、彼のChronologie（最初は、Grecke=Norden, *Einleitung in die Altertumswissenschaft* III 5, 1933, 所収）の異なる版が含まれる。

(55) E. Bickermann, Ritualmord und Eselskult, Ein Beitrage zur Geschichte antiker Publizistik, *Monatsschrift für Geschichte und Wissenschaft des Judentums* 71, 1927, 171-187, 255-264を参照。

(56) *Die Makkabäer., Eine Darstellung ihrer Geschichte von den Anfängen bis zum Untergang des Hasmonäerhauses*, Berlin 1935 (Bücherei des Schocken-Verlags 47). *Der Gott der Makkabäer. Untersuchungen über Sinn und Ursprung der Makkabäischen Erhebung*, Berlin 1937. 例えば、この書物の第５章、Die Deutung (117f.) 参照。

(57) E. Bickermann, *Die Makkabäer*, 75.

(58) E. Taubler (10. 10. 1879/Gostyn, Prov. Posen－13. 8. 1935/Cincinatti-Ohio). 取り分け、H. J. Zobel Hg., *E. Täubler, Biblische Studien*, Tübingen 1958, V－VII（文献目録IX-XII）のZobelの前文を参照。更に、S. W. Baron=R. Marcus, Necrology Eugen Täubler, *Proceedings of the American Academy for Jewish Research* 22, 1953, XXXI－XXXIV. K. Wilhelm, Zur Einführung in die Wissenschaft des Judentums, 同、Hg., *Wissenschaft des Judentums im deutschen Sprachbereich*, Bd. 1, Tübingen 1967, 28f. に所収。

(59) この点については、A. Momiglianoの考察参照。A. Momiglianoの書評、A. Heuß e A. Wucher, Studi su Th. Mommsen, *Secondo Contributo alla storia degli studi classici*, Rom 1960, 423に所収。Zobel, 同書、V, によれば、トイブラーは、モムゼンの下で研究した。Baron=Marcus, 同書、XXXVによれば、彼は、モムゼンとフォン・ハルナックの助手であった。Wilhelm、同書、28 によれば、モムゼンの私的秘書であった。しかし、奇妙にも、トイブラーには、モムゼンとのしかるべき関係のどんな指摘もない。Täubler, *Die Parthernachrichten bei Josephus*, phil. Diss. Berlin 1904, の経歴（Lebenslauf）を参照。そこでは、彼は、彼の教師たちから、デルブリュック、ハルナック、ヴァーレン、それにフォン・ヴィラモーヴッツ・メーレンドルフ等々を挙げ、オットー・ヒルシュフェルトだけを強調している。

(60) Baron=Marcus、前掲書、XXXIを参照。

(61)〈教育機関：Lehranstalt〉の使命は、教師やラビの養成であった。Hans Liebeschutz, *Das*

Judentum im deutschen Geschichtsbild von Hegel bis Max Weber, Tübingen 1967, 175を参照。

(62) Karl Jaspers, Heidelberger Erinnerungen, *Heidelberger Jahrbücher* 5, 1961, 8 (1－10) を参照。

(63) このことについては、Zobel、前掲書（註58)、ＶとBaron=Marcus、前掲書（註59)、XXXII。

(64) 1939年夏に作成された＜Geschäftsbericht der Lehranstalt für die Wissenschaft des Judentums über das Jahr 1938＞の、*Monatsschrift für Geschichte und Wissenschaft des Judentums* 83, N. F. 47, 1939 (復刊 1963)、632参照。

(65) Ernst Simon, *Aufbau im Untergang. Jüdische Erwachsenenbildung im nationalsozialistischen Deutschland als geistiger Widerstand*, Tübingen 1959, 61を参照。トイブラーは、そこでも、古代史の全般的テーマに関する講義をした。Geschäftsbericht …1938（註64)、636－641、講義目録 1938/1939年夏学期を参照。トイブラーの他には、Ernst GrumachとHans Liebeschützが、古代哲学と古典文献学を代表していた。Simon, 61ff. を参照。Grumach (7. 9. 1902-5. 10. 1969) は、1933年までケーニヒスベルク大学で古典文献学の講師であった。H. Flashar, *Gnomon* 40, 1968, 221-223を参照。

(66) トイブラーの新しい活動の場、Hebrew Union College－Jewish Institute of Religion, Cincinatti/Ohioは、リベラル・ユダヤ主義の方針に入れられる。*RGG*, 3.Aufl., III (1959) Sp. 997. それに、Eric E. Hirschler, *Jews from Germany in the United States*, New York 1955, 95, 164を参照。

(67) トイブラーは、この主張を、彼の古代史方面の研究領域の広がりの良き印象を伝えている論文集、*Tyche Historische Studien von E. T.*, Leipzig-Berlin 1926 の前文で述べている。

(68) A. Momiglianoの書評、Ernst Meyer, Römischer Staat und Staatsgedanke, 1948, *JRS* 39, 1949, 155 (155-157)。E. Taübler, Grundfragen der Römischen Verfassungsgeschichte, 同、*Tyche*, 181-212に所収を参照。

(69) *Einleitung in die Altertumswissenschaft*, Bd. 3, H. 4, Leipzig 1935を参照。エルンスト・マイヤーは、この本を知らなかった。Momigliano, 同書評、155f. を参照。*Deutschen Gesamt-katalog—Neue Titel 1935-1939*, Berlin 1940, 6126によれば、この本は、唯、二つのオーストリアの大学図書館にあるだけだった。

(70) Th. Mommsen, *Judaea und Juden*, Berlin 1936のトイブラーの後書、83-92. (＝

Bücherei des Schocken-Verlag Nr. 70）を参照。これは、モムゼンのローマ史、第４版（1894年）、第５巻、第11章、487－552のリプリントである。

(71) Täubler, 後書、83。

(72) 同書、89。モムゼンの叙述に関しては、Hans Liebeschütz, 前掲書、(註61), 194ffを参照。

(73) Täubler, 後書、90を参照。

(74) Th. Mommsen, *Römische Geschichte*, Bd. 5, 4Aufl., 1894, 497.

(75) 〈Bücherei des Schocken-Verlages〉の特色に関して、Simon, 前掲書、(註65), 68ffを参照。

(76) Zobel, 前掲書（註58)、VI を参照。トイブラーは、イスラエルに「ユダヤ聖書研究所」を創設することを当時（1938年８月）考えていた。

(77) F. Heichelheim (6. 5. 1901/Gießen－22. 4. 1968/Tronto). H. G. Gundel, F. M. Heichelheim, *Gnomon* 41, 1969, 221-224及び、同、Die Geschichtswissenschaft an der Universität Gießen im 20. Jahrhundert, *Ludwigs-Universität － Justus-Liebig-Hochschule* 1607-1957, Gießen 1957, 243（222-252）所収を各参照。ハイヒェルハイムと彼の家族に関しては、今でもなお、Erwin Knaus, *Die jüdischen Bürger Gießens 1933-1945. Eine Dokumentation*, Wiesbaden 1974, 34ff.。ハイヒェルハイムは、1934年英国で、彼の家族の家系図を手に入れていた（同書、35)。

(78) F. M. Heichelheim, *Die auswärtige Bevölkerung im Ptolemäerreich*, 1925（＝*Klio* Beiheft XVIII N. F. 5）を参照。

(79) Jena 1930（＝Beiträge zur Erforschung der wirtschaftlichen Wechsellagen, Aufschwung, Krise, Stockung, H. 3, hg. v. A. Spiethoff).

(80) Bd. 1, 2, Leiden 1938（復刊、3Bd. 1969)。第２版は、英語で著された。*An Ancient Economy History*, vol. 1-3, Leiden 1958-1970.

(81) Heichelheim,『経済的変動』(前文）とGundel, Heichelheim, 222f. を参照。

(82) Heichelheim,『古代経済史』第一巻、Ⅶを参照。

(83) 彼は1948年ギーセン大学で古代経済史名誉教授に任命された。G. Gundel, Heichelheim, 222f. を参照。

(84) Clemens (Emin) Bosch (6. 10. 1899/Köln—22. 7. 1955/Istanbul) PD Halle 1932. A. M. Mansel, Nekroloji Clemens Emin Bosch (1899-1955), *Belleten* 20, 1956, 295-303, 及び、Horst Widmann, *Exil-und Bildungshilfe. Die deutschesprachige akademische Emigration in die Türkei nach 1933*, Frankfurt 1973, 113, 256を参照。

(85) C. Bosch, *Die kleinasiatischen Münzen der römischen Kaiserzeit*, Teil II, Einzeluntersuchungen Bd. I, *Bithynien*, I. Hälfte Stuttgart 1935, IIIff. を参照。P. L. Strackによるこれらの巻と全体的構想の非常に積極的評価は、*Gnomon* 12, 1936, 421-425。更に、H. v. Aulock, Kleinasiatische Münzestatten, *Jahrbuch für Numismatik und Geldgeschichte* 19, 1969, 79 (79-88) を参照。

(86) Mansel, 前掲書 (註84)、298、Widmann, 前掲書 (註84)、256を参照。

(87) この点については、一般的には、ヴィドヴィマンによる解説を参照。ここでは、取り分けマールブルク大学元古典文献学私講師Georg Rohdeが記憶されねばならないが、彼は1935年の終わり、アンカラ大学古典文献学教授を引き受けた。Paul Moraux, Georg Rohde, *Gnomon* 33, 1961, 110 (109-111), 及びEduard Fraenkel, *Gedenkschrift für Georg Rohde*, Berlin 1961, 4f. を参照。古典文献学者Walter Kranz (23. 11 1884-18. 9. 1960) は、同様に1943年イスタンブール大学の講座を引き受けた。Widmann, 前掲書 (註84)、273を参照。

(88) Moraux, 同書、110を参照。

(89) Clemens Emin B. と云うようにクリスチャン名の変更乃至拡張が、ここから説明される。A. M. Mansel, 前掲書 (註84)、299を参照。ドイツでは、ボッシュは、いかなる宗派にも属していなかった。Personalbogen Bosch (R 21/380) を参照。

(90) マンセル、その他による様ざまな実証。ドイツ語で没後に現れた研究、*Quellen zur Geschichte der Stadt Ankara im Altetum*, Ankara 1967を参照。

(91) 取り分け、ここでは、1935年１月21日の『新しいドイツの大学の創設のための大学教師の罷免と配置換えの法律』が挙げられねばならない。Schäfer, 前掲書 (註18)、216ffを参照。

(92) Friedrich Hermann Münzer (22. 4. 1868/Oppeln－20. 10. 1942/Thresienstadt). マティアス・ゲルツァーによる以下の記述。Matthias Gelzer, Friedrich Münzer in memoriam, *Historia* 2, 1953/54, 378-380.

(93) F. Münzer, *De gente Valeria*, phil. Diss. Berlin 1891.

(94) Ernst Badian, From the Grachi to Sulla, *Historia* 11 1962, 216の註78 (197-245) を参照、シャーウィン・ホワイトとの論争について。ミュンツァーの論文集成は、ベーディアンによって準備された。

(95) R. Laqueur (27. 3. 1881/Strasburg－25. 11. 1959/Hamburg). F. M. Heichelheim, Richard Laqueur. － Lebensskizze eines deutschen Gelehrten, *Gießener Hochschulblätter* 9, 1961, Nr. 2. 4f.、及び、Josepf Vogt, P. Laqueur, *HZ*. 197, 1963, 789-90を各参照。

(96) 61ff. を参照（第２章第３節、未訳）。

(97) Heichelheim, Laqueur, 4f..

(98) Personalbogen R. Laqueur (R 21/402) を参照。更に、Heichelheim, *Das deutsche Reich in weltgeschichtlicher Beleuchtung, Festrede zum 18. 1. 1932*, Tübingen 1932, 3f. 22 を参照。

(99) Heichelheim, Laqueur, 4 及び、*Polybios* (1913)、*Flavius Josephus* (1920)、それに *Euseb* (1929) のラケールのモノグラフを参照。

(100) Gießen 1925.

(101) **1907年ゲティンゲン大学私講師、1909年シュトラスブルク大学員外教授、1912年シュトラスブルク大学教授、1912年ギーセン大学教授、1930年テュービンゲン大学教授、1932-36年 (?) 年ハレ大学教授、…、1959年ハンブルク大学名誉教授。**参照、Heichelheim, Laqueur, 5。

(102) 1955. 結論 (346) で、ラケールは、はっきりと、この作品は古代史の備え無しには理解されないだろうと指摘していた。

(103) R. Laqueur, Diodorea, *Hermes* 86, 1958, 257-290を参照。これについては、Vogt, Laqueur (註95)、790も参照。

(104) Mitteilung des Universitatsarchiv Köln － Prof. Dr. Th. Schieffer の1974年７月25日付、著者宛。これ以上の情報は、個人情報の保護期間の下で伝えられ得なかった。－（教職者の罷免の件で）帝国文部省の高級官吏Bergerのファイルには、経過の唯形式的な側面しか捉えられていない。それによれば、ハーゼブレックは、彼の退職移動を、1937年10月10日付きの（私には受け入れ難い）手紙で申請していた。形式的礼状には、＜Hは、25年以下の勤務年数である故、望ましくない＞と見える (R 21/39, Bl. 5)。**J. Hasebroek (14. 4. 1893/Hamburg － 15. 2. 1957/Lübeck), 1921年ハンブルク大学私講師、1925年チューリッヒ大学員外教授、1927年ケルン大学教授、1938年退職**（参照、*KGK* 6, 1940/41, Sp. 645)。

(105) この点については、Willehad Paul Eckert, *Kleine Geschichte der Universität Köln*, Köln 1961, 194fを参照。それは、ハーゼブレックの名前だけを挙げている。ケルン大学の歴史の関連文書には、ハーゼブレックについては全く指摘がない。Kurt Düwell, Literaturangaben, Universität, Schulen und Museen. Adenauers wissenschafts-und bildungpolitische Bestrebungen für Köln und das Rheinland, H. Stehkämper Hg., : *Konrad Adenauer. Oberbürgermeister von Köln*, Köln 1976に所収, 171、註18を参照。

(106) 古代経済史の専門家のFriedrich Oertelは、既に1923年にケルン大学に講座職を保持して

いた。参照、*Klio* 18, 1923, 211. この点の重要性の留意についても、Düwell, 同書, 167ff。

(107) J. Hasebroeck, *Die Fälschung der Vita Nigri und Albini in den SHA*, phil. Diss. Heidelberg (Berlin) 1916, 83f., 及び、同、*Untersuchungen zur Geschichte des Kaisers Septimius Severus*, Heidelberg 1921を参照。

(108) ここでは、*Staat und Handel im alten Griechenland*, Tübingen 1928, 英語版、London 1933, 新版、1966、及び、*Griechische Wirtschafts-und Gesellscaftsgeschichte bis zur Perserzeit*, Tübingen 1931のモノグラフのみを挙げよう。Hermann Bengtson, *Griechische Geschichte*, 4. Aufl., München 1969, 11を参照。

(109) E. Ziebarth, Neue Beiträge zum griechischen Seehandel, *Klio* 26, N. F. 8, 238 (231-247) を参照。ハーゼブレックが顧みられるべき古代経済史の新たな展開については、Edouard Will, Trois quarts de siecle de recherché sur l'économie grecque antique, *Annales* 9, 1954, 7-22を参照。

(110) この点の最後の証拠は、J. Brakeの論評であると思われる。*Gnomon* 13, 1937, 434-438.

(111) Franz Schehl (20. 1. 1898), 1929年グラーツ大学私講師、1936年グラーツ大学員外教授、(Personal-und Vorlesungszeichnis d. Univ. Graz 1938年夏学期の最後の記載)。1/2ユダヤ人として危険に晒されたシェールは、1938年夏学期、病気と申し出た。参照、Personalbogen F. Schehl (UA Graz). シェールの評価も参照、Bundesministerium für Unterricht宛てのグラーツ大学哲学部長の1933年３月13日付き該当箇所；ローマ古代研究の教育活動に対する配慮 (Personalakt Schehl, UA Graz)。彼は、後にアメリカ、ロードアイランド、ポーツマスで、修道院学校 (Priory School) の教師として働いた。シェールは、彼に再び提供された講座職に戻ると云う事態に、遺憾ながら、戦後出会わなかった。――私は、この消息を、グラーツ大学公文書館、大学講師、W. Höflechner博士の1976年９月６日付きの著者宛ての親切なる報告に負っている。――今日、スタンフォード大学で働いている古代史家、Antony E. Raubitschek (4. 12. 1912) も、多分、オーストリア＜併合＞との関連でアメリカに行った。*Directory of American Scholars*, Bd. 3. 5 Aufl., New York 1969, 328を参照。

(112) Eva Ehrenberg, *Sehnsucht － mein geliebtes Kind. Bekenntnisse und Erinnerungen*, 発行地無記載, (Oberursel) 1963, 52ff., 及び*Ancient Society and Institutions. Studies presented to V. Ehrenberg*, Oxford 1966, X (文献目録付 XIff.) 及び、J. Vogt, Ehrenberg, *Gnomon* 48, 1976, 423-426を各参照。V. Ehrenberg (22. 11. 1891/Altona － 25. 1.

001976/London), 1922年フランクフルト大学私講師、1928年プラハ・ドイツ大学非常勤員外教授、1929年員外教授、1934年-39年教授、1949年-57年ロンドン大学教授。

(113) E. Ehrenberg、同書、48を参照。この関連の中では、ヴィクトル・エーレンベルクと遠い親戚であった近代ユダヤ主義の最も重要な哲学者、Franz Rosenzweigとの親しい結びつきは重要でなくはなかったであろう（同書、35ff.)。

(114) V. Ehrenbergの書評、H. J. Bell, *Juden und Griechen im römischen Alexandreia* (Leipzig 1926), *HZ* 136, 1927, 611。

(115) A Totalitarian Stateと云うタイトルで、これは、V. Ehrenberg, *Aspects of the Ancient World*, Oxford 1946, 94-104に印刷もされた。これについては、Hans Schaefer, Victor Ehrenbergs Beitrag zur historischen Erforschung des Griechentums, *Historia* 10, 1961, 394, 398f. (387-408)。

(116) V. Ehrenberg, Alexander the Great, 同、*Aspects*, 167-178に所収。この講演は、1941年になされ、1944年、追記（178）が増補された。

(117) E. Badian, Dedication, *Ancient Society and Institutions. Studies presented to V. E.*, IX.

(118) Arthur Stein (10. 6. 1871/Wien - 15. 11. 1950/Prag). 1915年プラハ・ドイツ大学私講師、1918年員外教授、1922年教授。V. Ehrenberg, A. Stein, *Historia* 1, 1950, 512f., 及び、A. Betz, Professor Arthur Stein†, *Anz. f. d. Altertumswissenschaft* 4, 1951, 193-194. 更に、Arthur Stein－Bibliographie zusammengestellt von L. Vidman, *Eunomia* II, 1958, 40-49, 並びに、K. Beránek, Listy filologiké 80, *Eunomia* 1, 1957, 81-83を各参照。

(119) *Klio* 25, N. F. 7, 1937, 227 (226-244) を参照。モムゼンの弟子、H. Dessau (1858-1931) は、彼が、ユダヤ教信仰を篤く信じていたが故に、教授職を得なかった。

(120) A. Stein, *Der römische Ritterstand*, München 1927, X.

(121) E. Groag (2. 2. 1873/Prerau - 19. 8. 1945/Wien). 1919年ヴィーン大学私講師、1925年員外教授、主席図書館司書（Oberstaatsbibliothekar）。同、*Die Reichsbeamten von Achaia in spätrömischer Zeit*, Budapest 1946, 特に、３、編纂者A.（ndreas）A.（lföldi）の前文を参照。

(122) *P. I. R. saec. I, II, III.* E. Groag, A. Stein, L. Petersenによる改訂版、Berlin 1933ff.。これについて、今では、K. P. Johne, 100Jahre Prosopographia Imperii Romani, *Klio* 56, 1974, 21-27。

(123) A. Stein, *Die Reichsbeamten von Dazien*, Budapest 1944, 及び 同、*Die Präfekten von Ägypten in der römischen Kaiserzeit*, Bern 1950, 7f. を参照。

第２節 ドイツ古代学の＜亡命による損失＞

(124) William M. Calder III, Die Geschichte der Klassischen Philologie in den Vereinigten Staaten, *Jahrbuch für Amerikastudien* 11, 1966, 232ff. (213-240) が、最初の総括を提示した。

(125) ▶L. Bieler (geb. 20. 10. 1906). ▶ E. Fraenkel (17. 3. 1888-5. 2. 1970). 参照、H. Lloyd-Jones, *Gnomon* 43, 1971, 634-640。▶ H. Fränkel (7. 5. 1888-8. 4. 1977). ▶ P. Friedländer (21. 3. 1882－10. 12. 1968). 参照、W. Bühler, *Gnomon* 41, 1969, 619-623。▶ K. v. Fritz (geb. 25. 8. 1900). 参照、(註134)。F. Jacoby(19. 3. 1876-10. 11. 1959). 参照、W. Theiler, *Gnomon* 32, 1960, 387-391。▶ W. Jaeger (30. 7. 1888-19. 10. 1961). 参照、H. Langerbeck, *Gnomon* 34, 1962, 101-105。▶ E. Kapp (geb. 21. 1. 1888). ▶ P. Maaß (18. 11. 1880-15. 7. 1964). 参照、H. Lloyd-Jones, *Gnomon* 37, 1965, 219-221。▶ E. Norden (21. 9. 1868-13. 7. 1941). 参照、F. W. Lenz, Erinnerungenn an E. N., *Antike und Abendland* 7, 1958, 159-171並びに同、E. Nordens Leistung für die Altertumswissenschaft, *Das Altertum* 6, 1960, 245-254。▶ R. Pfeiffer (geb. 28. 9. 1889). ▶ G. Rohde (23. 12. 1899-21. 10. 1960). 参照、(註87)。

(126) ▶ K. Latte (9. 3. 1891-18. 6. 1964). 参照、R. Stark, *Gnomon* 37, 1965, 215-219。▶ K. Mras (6. 6. 1877-7. 7. 1962) .参照、R. Hanslik, *Gnomon* 35, 1963, 107-110。▶ O. Regenbogen (14. 2. 1891-8. 11. 1966). 参照、H. Gundert, *Gnomon* 39, 1967, 219-221。▶ K. Ziegler (2. 1. 1884-8. 1. 1974). 参照、L. Wickert, *Gnomon* 46, 1974, 636-640。

(127) ▶ H. Bloch (18. 8. 1911). 参照、*Who's Who in America*, 38. Aufl., 1974/75, 289。▶ L. Edelstein (23. 4. 1902-16. 8. 1965). 参照、H. Diller, *Gnomon* 38, 1966, 429-433。▶ E. Grumach (7. 11. 1902-5. 10. 1967). 参照、(註65)。▶ F. W. Lenz (1896-15. 11. 1969)。参照、B. Kytzler, *Gnomon* 43, 1971, 526-527。▶ E. Schlesinger (28. 12. 1909-13. 8. 1968). 参照、W. Marg, A. Thierfeder, *Gnomon* 41, 1969, 430-432。▶ O. Skutsch (geb. 4. 2. 1906). ▶ F. Solmsen (geb. 4. 2. 1904). ▶ St. Weinstock (7. 11. 1901-5. 6. 1971). 参照、P. J. Parsons, *Gnomon* 46, 1974, 217-220。

(128) *Gnomon* 10, 1934, 111を参照。アメリカにおける彼の更なる経歴に関しては、*Gnomon*

11, 1935, 224及び、同、12, 1936, 400、更に、W. Calder III, 232ff. を参照。古典文献学に対するイェーガーの貢献については、Ada Hentschke, Ulrich Muhlack, *Einführung in die Geschichte der Klassischen Philologie*, Darmstadt 1972, 128ff.を参照。

(129) 1941年12月６日付き、秘密‐文化政策通告（Kulturpolitischen Informationen)、第５(IfZ-Archivnr. 1093/53)。1943年７月31日付き文化政策通告第３、及び1943年９月３日付同通告第３も参照。そこでは、エドゥアルト・ノルデン没後２年（註125, 参照)、彼の生誕75年の言及が禁じられた。

(130) この点は、97頁以下参照。(第３章２節、未訳)。

(131) この点は、86頁以下参照。(第３章、未訳)。Ernst Nolteの推測では、その当時解職された大学教員達の半数も、〈政治的に意識した、過激な行為を決意したナチズム体制の敵対者〉と、見做されたことすらなかったであろう。同、Zur Typologie des Verhaltens der Hochschullehrer im Dritten Reich, *Aus Politik und Zeitgeschichte*, B 46/65, 17. 11. 1965, 12, (3-14) に所収を参照。

(132) ▶ M. Bieber (31. 7. 1879). 参照、R. Winkers, M. Bieber zum 95. Geburtstag, *Gießner Universitätsblätter* 1, 1974, 68-75。▶ O. J. Brendel (10. 10. 1901-8. 10. 1973). ▶ P. F. Jacobsthal (23. 2. 1880-27. 10. 1957). 参照、H. Möbius, *Gnomon* 29, 1957, 637f.。▶ G. Karo (11. 1. 1872-12. 11. 1963). 参照、F. Matz *Gnomon* 36, 1964, 637-640。▶ K. Lehmann (1894-17. 12. 1960). 参照、Ph. Pray Bober, *Gnomon* 33, 1961, 526-528。▶ G. M. A. Hanfmann (20. 11. 1911) は、ロシアからの移民家族の出身で、学位授与の完了後、ドイツを去らねばならなかった（1934年)。参照、*Directory of American Scholars*, Bd. 1, 5 Aufl. 1969、及び、*Encyclopaedia Judaica* 7, 1971, 1261。▶ W. Schwabacher (22. 7. 1897-30. 8. 1972). 参照、C. Boehringer, Schw. Numism. *Rundschau* 52, 1973 155-161。

(133) ▶ E. Levy (23. 12. 1881). 参照、S. Kaznelson, Hg., *Juden im deutschen Kulturbereich*, 3. Aufl., Berlin 1962. 603。▶ F. Pringsheim (7. 10. 1882-24. 4. 1967). 参照、H. J. Wolff, *Gnomon* 39, 1967, 732-735。▶ E. Rabel (28. 1. 1874-7. 9. 1995). 参照、H. J. Wolff, *ZRG* (RA) 73, 1956, XI-XXVIII。▶ F. Schulz (16. 6. 1879-12. 11. 1957). 参照、W. Flume, *ZRG* (RA) 75, 1958, 496-507。▶ D. Daube (2. 2. 1909)と、▶ H. J. Wolff (27. 8. 1902) については、A. Momigliano, *Jews*, (註22), 224f. 参照。

(134) K. v. Fritz, 1927年ミュンヘン大学私講師、1931年ハンブルク大学、1933年-35年ロストック大学員外講師、1937年-54年ニューヨーク、コロンビア大学、1954年-58年ベルリン自由大学、

1958年ミュンヘン大学。参照、*Geschichte der Universitat Rostock 1419-1969*, Bd. 1, Rostock 1970, 256f.。

(135) それと対応した傾向を、ユダヤ人側からも戒めている。R. Weltsch, 序文 (1959)、Kanznelson, 前掲書 (註133)、XX所収。

(136) Christ, Entwicklung, 584を参照。

(137) Pross, 前掲書 (註51)、 67. アメリカの後進たちに対する成果に関しては、Calder III, 前掲書 (註124)、232。

(138) E. Bickermann (1952-1967), M. Bieber (1936-1954), O. J. Brendel (1956-1970), K. v. Fritz (1938-1954), E. Kapp (1941-1955).

(139) Norman Bentwich, *The Rescue and Achievement of Refugee Scholars*, Den Haag 1953, 特に、付録、A-C, 99f.。ベントヴィッチは、イギリスの以下のドイツの古代学者たちを挙げ、そのうち僅か半分のものしか教授職を得なかったとしている。Ed. Fraenkel, R. Pfeiffer, F. Jacoby, P. Maaß, C. O. Brink, O. Skutsch.（リストは、不完全である)。この事実の指摘は、亡命者支援のためにイギリスが払った甚大な労苦を決して貶めるものではない。

(140) 38頁参照（クレメンス・ボッシュについて。本拙訳、204頁)。

(141) エーレンベルクについては、41頁参照（本拙訳、207頁)。K. v. Fritz, Conservative reaction and one-man rule in ancient Greece, *Political Science Quarterly* 56, 1941, 51-83. 同、Totalitarismus und Demokratie im Alten Griechenland und Rom, *Antike und Abendland* 3, 1948, 47-74, 及び、M. Gelzerの書評、K. v. Fritz, *The Theory of Mixed Constitution in Antiquity* (1954), 同、*Kleine Schriften*, Bd. 3, Wiesbaden 1964, 191 (191-200) に所収。

(142) Hugh Lloyd-Jones, E. Fraenkel, *Gnomon* 43, 1971, 639f.

(143) この問題圏全般について、Alfred Vagts, *Deutsch-Amerikanische Rückwanderung*, Heiderbelg 1960, 141ff.。

(144) G. Rohde, K. v. Fritzと云う二人のベルリン自由大学の最初の古典文献学者たちは、偶々、亡命者であったのではない。E. Fraenkel, Gedenkschrift für G. Rohde, Tübingen 1961, 5f. を参照。帰国亡命者には、E. Kappも入るが、彼は、1955年、ハンブルク大学の彼の元の教授職を得た。この点については、H. u. J. Diller, *E. Kapp－Ausgewählte Schriften*, Berlin 1968, 319ff.。

訳者付記

出典

Volker Losemann, *Nationalsozialismus und Antike Studien zur Entwicklung des Faches Alte Geschichte 1933-1945.*〔Historische perspektiven 7〕, Hamburg (Hoffmann und Campe) 1977.

「ナチズムと古代」に関わる三十数年も前に著され、既にこの方面の古典的研究と呼んでよいであろうローゼマンの研究書であるが、この書が、当時いかに欧米諸国で反響を呼んだかは、1981年までに専門学術誌、新聞書評等で27本に及ぶ論評の対象にされていることからも明らかであろう（Beat Näf Hg., *Antike und Altertumswissenschaft in der Zeit von Faschismus und Nationalsozialismus Kolloquium Universität Zürich 14.-17. Oktober 1998.* Mandelbachertal/Cambridge 2001, 17による）。カール・クリストゥは、全体として見れば、この書物は未だに乗り越えられていないと、先に一部を訳出した『クリオの変貌』〔(その１)、四国学院『論集』128号〕に記しているが、これら両書を重ね合わせると、この時代のドイツ古代史学界とそれを取り巻く状況が陰影に富み、立体的に理解されるように思う。この時代のドイツにおける古代史研究の動向に個人的に関心を持つ者として、研究ノートの積りで第１部の訳出を試みたが、これはその一部である。

なお、209頁、＜Abteilung ZP, Kulturpresse＞は、手持ちの事典類等で調べた限りでは、なお正確には不明であるが、文中のように仮訳している。ご教示を頂けましたら恐縮です。

註に関しては、部分訳のために、本来あるべき文献目録、文書館資料、未公開資料等の指示を略している関係等で、必要最小限の形式的修正を加えているが、それでも一部、遺憾ながら不十分な箇所が生じている。

附録として原書では最後に掲載されている当時の教員配置表も載せた。

以下に第１部第１章を除いた目次を載せておく。

緒言

序論

　　第１節　総論的前文

　　第２節　古代に対するナチズムの指導層の関係

第１部

第２章　抗争し合うナチス大学政策における古代史講座の教員配置（1933－1945）

第１節　古代史専攻の教員動向に関する概観

第２節　大学政策を担っている者たち

第３節　大学における古代史及び古典文献学専攻の代表者

第４節　講座の教員配置（1942－1945）

第３章　古代学の自画像

第１節　戦争開始までの動向

第２節　ナチス大学教員同盟の＜教員共同合宿＞

第３節　＜古代学の戦時動員＞

第２部　大学外での古代学的仕事の端緒

第１章　教育・研究協会≪父祖の遺産≫における古代学の動員

第１節　古典古代学の教育・研究の所在地

第２節　≪父祖の遺産≫の古代史家としてのフランツ・アルトハイム

第３節　≪人種学的－歴史学≫研究所の構想

第２章　リヒャルト・ハルダーと、アルフレート・ローゼンベルクの≪大学≫

第１節　≪大学≫構想における古代研究

第２節　インド・ゲルマン民族精神史研究所の組織とプログラム

第３節　＜ギリシアのローゼンベルク特別部隊＞と＜ギリシア古代学の特別本部＞

第４節　戦争終結までの研究所の仕事